

イスラーム信頼学

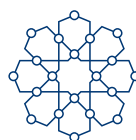
News Letter No.02

2022



巻頭特集：

2021年度国際会議 「国家と市場の相克と調和」



イスラーム信頼学

Islamic Trust Studies



- 03.....**巻頭言**
プロジェクトは2年生から3年生へ
コネクティビティと信頼を問うとき
——黒木英充
- 04.....**信頼のレシピ**
ラポールでは届かないところ
——池田昭光
- 05.....**巻頭特集**
国際会議
「国家と市場の相克と調和」
- 11.....**イスラーム信頼学エッセー**
- 12.....1 アッサラーム・アライクム
ムスリム同士が会うとき
——山根 聡
- 14.....2 「信頼」と法人類学
——高野さやか
- 16.....**信頼を考えるための本**
——子島 進
- 17.....**〇〇に埋め込まれた信頼**
- 18.....1 雑誌に埋め込まれた信頼
——野田 仁
- 20.....2 捕虜コミュニティにおけるコネク
ティビティ
——アレクサンデル・マレット
- 23.....**シビルダイアログ・キャラバン**
「動物がつなぐ世界」報告
——太田（塚田）絵里奈
- 26.....**TUFSオープンアカデミー講座**
- 27.....**公募研究の紹介**
- 28.....**特集**
**信頼学の
キーワードを考える**
- 33.....**教えて！山本さん**
アルジェリア女性の
「手仕事」を支える
社会的ネットワークと実践知
——山本沙希
- 34.....**研究の最前線1**
ロヒンギャ問題の最前線
——日下部尚徳
- 36.....**研究の最前線2**
人文情報学からつながる・ひろがる
——熊倉和歌子
- 38.....**研究員等紹介**
- 40.....**各班の概要と活動**
(A01, A02, A03, B01, B02, B03, C01)
- 54.....**2021年度の活動報告**
- 58.....**受賞ニュース・表紙解説**
- 59.....**執筆者プロフィール**

プロジェクトは2年生から3年生へ

コネクティビティと信頼を問うとき



領域代表

黒木英充

東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所
北海道大学スラブ・ユーラシア
研究センター（兼任）

「イスラーム信頼学」プロジェクトの始動後1年1ヶ月の段階で本稿を書いています。採択後の大急ぎの立ち上げから、メンバーの多くが息つく暇もないまま走ってきました。

そんななか、本年度の目玉行事として、国際会議「国家と市場の相克と調和」が12月に開催されました。日本と東南アジア、ヨーロッパを結んだ3日間にわたるオンライン会議でした。18世紀のインド洋や地中海における外交・貿易から今日のサイバー空間における金融工学までをテーマに、コネクティビティや信頼のもつ意味、さらには将来の人類社会のあり方に至るまで、イスラームに軸足を置いた熱い議論が交わされました。私たちのプロジェクトの問題意識が海外の研究者たちにも共有され、共通の議論のプラットフォームができていたことがわかりました。この1年余りでおおよそ50のワークショップが開催され、その大半が複数の計画研究班、あるいは外部組織との共催で行われ、本プロジェクトのヨコの関係も拡大・強化されてきました。

しかし、COVID-19の影響は、国内外の人々の行動、過去の足跡の拡がりを追う研究者にとって、あまりにも大きなチャレンジです。世界各地で移動や接触が大きく制限されるなか、コネクティビティが根本的に問われ、信頼も試されてきたのですが、それを現場に身を置いて観察できないのですから。しかし、従来とは異なるオンラインでの関係づくりのきっかけを得ると同時に、各人が経験に基づいた想像力をはたらかせ、次に現場を訪れる際の調査研究方法を鍛え直すための、熟成の機会に変換できたのではないのでしょうか。

私は9月にわずか数日ながらレバノンを訪れることができました。巨大な危機に翻弄される人々が、いかにしてつながりを維持・拡大し、信頼を厳しく問い、その構築を求めているか、垣間見ました。

2年度目から3年度目への移行を控え、これまでの活動成果をバネに、新たな状況下での研究を進めて参りましょう。



レバノンの首都ベイルート中心部の貼り紙。2020年8月の港湾大爆発事件と破綻経済（+コロナ状況）下の人々の抗議の意志と苦悩が示されている。左側に最近2年間、市民が繰り返し政府に突き付けてきた言葉“NO TRUST”がみえる。（2021年9月、撮影・黒木英充）

ラポールでは届かないところ

「信頼のレシピ」、落ちつかないコーナー名である。
 信頼というのは材料と手順にしたがって作れるものなのだろうか。
 そもそも信頼は作らなくてはならないものなのか。
 レバノンでの経験から検討したい。



ベイルートのハムラ通り。商業と観光業が特色。(2017年、池田昭光撮影)

筆者はこれまでフィールドワーク（現地調査）をもとに、中東・レバノン共和国の社会を研究してきた。人類学や社会調査の教科書では、フィールドワークは現地住民とのラポール（信頼関係）を築いた上で行われるべきものとされる。さもなければ、人々やコミュニティを研究の名のもとで利用したり、ひどい場合には搾取したりすることになりかねない。そのような力関係の差が生じないよう、倫理的な配慮が必要とされる。

しかし、おおざっぱな自己評価をするのであれば、私はレバノン人から信用（以下、信用／信頼の区別にこだわらずに書く。意識的な区別ができるほど両者をとらえきれてないためである）されていると、これまで思えたためしが無い。ある程度の現地滞在を経た段階でも、いざ聞きとりを始めると、その場にいあわせた別の人物から聞こえよがしに「うわ、スパイが始まった」と言われたことがある。あるいは、人々が滞在費用の出所を知りたがるので、

文部科学省の科学研究費から支給されていると答えるのだが、筆者がどのような説明をしても、日本政府のエージェントか何かのように受けとられた。

過去にレバノンで研究を行った欧米の人類学者についても、やはりスパイの疑いを人びとがいまだ口にするのを確かめることもできた。さらに、アラブ系の研究者でも同じような（場合によってはさらにきつい）経験をしている。あるパレスチナ系アメリカ人の人類学者は、ベイルートの歴史・社会的記憶をテーマに調査を行っていたが、米国への一時帰国ののち、現地で得た記録類を住居に残したまま再入国が認められなかったと、著作に記している（A. Sawalha, *Reconstructing Beirut*, University of Texas Press, 2010）。

この地域の近現代史や政治情勢について明るければ、レバノンで起きた内戦（ここでは1975-90年のものを指す）や政情不安の経験ゆえに、人々がこうした不信感を抱くのではないかと思うかもしれない。それを否定するつも

りはないし、実際のところ、内戦に関する語りや証言は、まず「センシティブ」なトピックであり、しっかりしたラポールがなければ得られない研究資料だと、筆者も認識していた。

しかし2017年のある日、それまで何度も利用してきたベイルートのホテルからタクシーで移動した際、そのような認識に収まらない経験をした。このホテルを拠点とする運転手たちが何人もいるなか、その日はあまり親しくはない人物が筆者にあてがわれた。そのため、たいした会話もなく車に乗っていると、なんの前触れもなしに唐突に、自分のイトコが内戦中、シリア軍により投獄されていたと、運転手が語りだした。イトコは政治活動をしておらず、投獄された理由は不明である。彼が収容された施設では41名が同じ場所に詰めこまれ、立ったまま眠るしかなかったという。あれこれ手を尽くし、シリア軍の情報局員にウイスキーを贈るなどして居場所をつきとめ、四ヶ月後にイトコは釈放された。理不尽で陰惨な内容もさることながら、この運転手が堰を切ったかのように早口で語り出したのが筆者には印象的であった。

運転手との間にしっかりしたラポールがあったとは筆者には思われな。とはいえ、全く見ず知らずというわけでもない。両者の狭間で突然噴きだした語りが届けられたのは、ラポールを「築く」とか「作っていく」という発想とは次元の違う経験と、筆者はとらえている。

ラポールにかんする教科書の教えはもっともである。しかしそれは、世界中どこでもラポールなる発想が通用すると、世界を均質にとらえる発想と紙一重にも見える。その結果として「ラポールでは届かない地平」が見失われるのであれば、何のためのフィールドワークなのか、本末転倒であろう。

「信頼のレシピ」に全面的には賛同できず、どこか身構えてしまうゆえんである。

国家と市場の 相克と調和



イスラーム信頼学プロジェクトでは、2021年12月10日-12日の三日間にわたり第一回国際会議“Conflict and Harmony between State and Market”（国家と市場の相克と調和）を開催した。今後、計三回の開催が予定されている国際会議の一回目であり、本プロジェクトを構成する2つの研究グループ（A01班、B01班）による合同企画であった。同様の大型合同企画は来年度および再来年度にも継続する予定であるが、いずれも最終年度となる2024年度の総括国際会議に向けたプラットフォームとなることが期待されている。本国際会議の目的を具体的に述べれば、戦略知としての「イスラーム信頼学」を精緻化するための各グループの知見の集積、およびその国際的発信を見据えた海外の研究者コミュニティとの関係づくりである。

コロナ禍のなかで第一回はオンライン開催を余儀なくされたものの、海外からの登壇者は各々のホームグラウンドであるイギリス、オランダ、マレーシアから研究報告を行った。一方、聴者については、学部生からシニアの研究者まで国内外の幅広い層から延べ145人が参加する盛況ぶりであった。計三日間の報告はムスリム国家あるいはイスラーム経済を主題としつつも、対象となる地域および時代は多岐にわたった。次頁以降で詳述される通り、近世ムスリム国家（オスマン朝、サファヴィー朝）の外交史から現代マレーシアのイスラーム経済、インド洋を跨いだオランダ東インド会社の活動、そしてデジタル技術も駆使したイスラーム経済のグローバルな実践にまでわたった。加えて、各報告の終了後は、専門領域の垣根を超えた質問が多数寄せられ、分野横断的に「信頼」と「コネクティビティ」を考える貴重なフォーラムとなった。一連の報告および討議は、本企画が国内外の研究コミュニティの知的関心に広く応えたことを示しているといえよう。

本企画を振り返るうえで、プロジェクトの領域代表である黒木英充および開催班の代表者である近藤信彰と長岡慎介から、発表者の招聘と合わせた対面交流への期待が繰り返し表明されたことにも触れておきたい。このように、第一回の国際会議は、海外の研究者コミュニティとの関係づくりという点においても来年度以降の展開が大いに期待できる場となった。

文責：水澤純人、守田まどか

イスラーム信頼学第一回国際会議

“Conflict and Harmony between State and Market” (国家と市場の相克と調和)

2021年度のイスラーム信頼学のもっとも大きなイベントは12月10日から12日に行われた第一回国際会議でした。そのテーマ「国家と市場の相克と調和」は、いかにして生まれたのでしょうか。

長岡慎介 京都大学

近藤信彰 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

イスラーム信頼学の第一回国際会議のテーマを「国家と市場の相克と調和」としました。これは、イスラーム信頼学という学術に変革をもたらすプロジェクトにおいて、国家と市場という問題は避けて通ることができない重要な問題だからです。経済を主に扱うA01班と国家を主に扱うB01班が三つのパネルを企画する形を取りました。

イスラーム文明において、市場は重要な役割を担ってきたことは言うまでもありません。預言者ムハンマドは商業に従事した経験があり、宗教としてのイスラームの教義の中にも、貿易や市場に関連する表現が見られることが知られています。つまり、貿易と市場は、ネットワークを広げ、さまざまな交渉が行われる場であって、イスラーム的コネクティビティの中核というべき部分なのです。現代におけるイスラーム経済をめぐるさまざまな議論も、イスラームと経済、市場との密接な関係を示すものです。

一方、国家は本質的には階層的もしくは垂直的権力関係に基づいており、水平方向に働くコネクティビティとは一線を画します。しかし、ウマイヤ朝が滅亡した後、イスラーム共同体には複数の政治権力が並立する事態が続いており、それぞれの国家がどのような関係にあり、そこに信頼や不

信がどのように関わってきたかは、コネクティビティの視点から検討に値します。そして、こうした国家間の関係がイスラーム共同体の概念とどのように関わるのかが問われるのです。

さらに、国家の持つ垂直的権力関係が水平的コネクティビティの現れである市場とどうかかわるのか、国家による市場への介入、管理と自由であるべき市場との関係が問題となります。

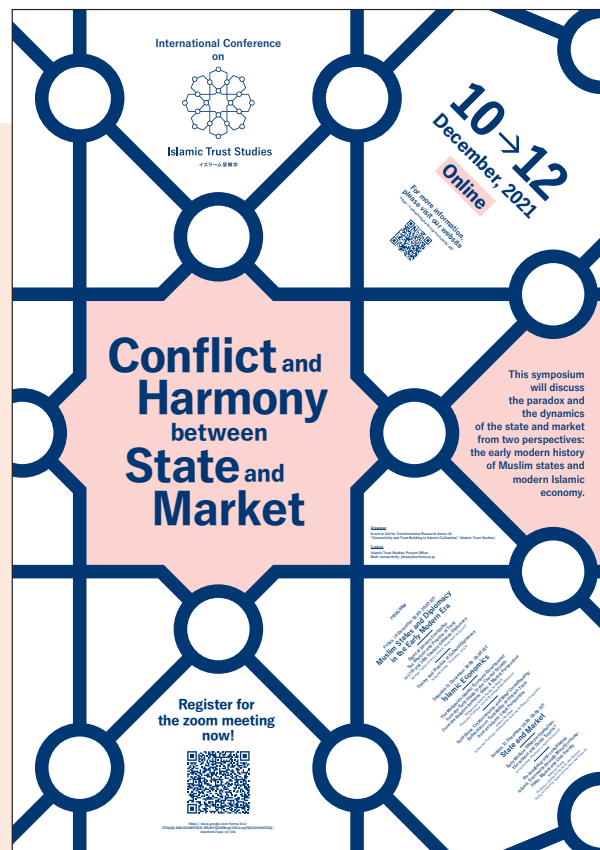
以上の観点から、三日間で三つのセッションを組織することとなりました。

12月10日の第一セッションは“Muslim States and Diplomacy in the Early Modern Era” (近世におけるムスリム国家と外交)と題し、西洋がまだ世界における政治的・経済的覇権を獲得していなかった近世のムスリム国家とその外交活動に焦点を当てることにしました。報告者として、Michael Talbot氏(グリーンウィッチ大学)をお招きしました。タルボット氏は、オスマン外交史の気鋭の研究者で、イギリス＝オスマン関係について*British-Ottoman Relations, 1661-1807* (Woodbridge: Boydell & Brewer, 2017)という著作をお持ちです。研究の豊富なオスマン外交史のなかで、二か国間の条約(アフドナーメ)やさまざまな外交慣行について幅広い知見を持つタルボット氏に、オスマン外交と信頼についてお話をいただくのは有意義なことであると考えました。もう一人の報告者はB01班の代表でもある近藤信彰(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)が務めることになり

した。西側にヨーロッパがあるという地理的条件からオスマン外交の研究の中心がヨーロッパ関係に偏りがちなのも当然です。それに対して、周辺をムスリム国家に囲まれているサファヴィー朝にとっては、ムスリム諸政権との関係がより重要となります。個別の外交関係を越えて、サファヴィー朝について外交を貫くロジックはどういうものであったか、理論と実際の違いはどのような点にあるかなどを示したいと考えました。

11日の第二セッションは、“Islamic Economics” (イスラーム経済学) と題し、現代イスラーム経済における国家と市場の関心に焦点を当て、マレーシアとデジタル経済についての議論を行いました。マレーシアは、イスラーム金融とハラール産業の国際的なハブとして知られており、現代イスラーム経済の成功を最も体現する存在として知られています。そうした成功の背景には、国家による強力なイニシアティブがあり、国家と市場が車の両輪として、同国のイスラーム経済は発展してきたのです。他方、デジタル経済については、イスラーム金融の最先端の実践として近年、急速に浸透しつつあります。国家と市場が調和しながら発展を遂げてきたマレーシアのイスラーム経済実践とは異なり、デジタル経済においては、しばしば成長のための市場の推進力と国家による規制が対立することがあります。イスラーム金融においても然りで、国境を越えてグローバルに展開しようとするイスラミック・デジタル・エコノミーが、既存の国民経済システムの土台を揺るがす事態が生じようとしています。このセッションでは、こうした二つの事例にそれぞれ精通している気鋭の若手研究者として、マレーシアについては、Muhammad Hakimi bin Mohd Shafai氏 (マレーシア国民大学)、デジタル経済については、Khashan Ammar氏 (立命館大学) を招き、本会議のアジェンダからみた両事例の位置づけについて議論を行いました。

12日の第三セッションは、“State and Market” (国家と市場) と題し、前日までの議論を踏まえて、近世史と現代イスラーム経済のそれぞれの第一人者



を招き両側面から総合的な議論を行うこととしました。最初の報告者は南アジア史研究、グローバル・ヒストリーを専門とする Jos Gommans 氏 (ライデン大学) にお願ひしました。ホマンズ氏は学術雑誌 Journal of Economic and Social History of Orient の編集長として、“Empires and Emporia” (帝国と市場) という特集を組んだ経験があり、イスラーム側と東インド会社の両方の視点を持ち、この問題を語る上で最適な研究者であると考えました。二人目の報告者として、Mehmet Asutay 氏 (ダラム大学) を招きました。アスタイ氏は、近代資本主義を相対化する視点から、イスラームの経済哲学やそれにもとづいた経済実践の世界史的意義について探究を行ってきました。そして、近代資本主義のグローバルな拡大および高度な金融化を経て、それ自体が置き去りにしてきたモラルの重要性に再注目し、イスラームの知を活用したモラル・エコノミーの再構築のための知的模索を行っています。アスタイ氏は、社会に埋め込まれた自生的な市場に根ざしたイスラーム経済のあり方にこそ、モラル・エコノミー再構築の可能性を見いだしており、それは本会議のアジェンダである国家と市場の力学に対しても新たな視座を与えうるものであると考えました。

「前近代におけるムスリム国家と外交 Muslim States and Diplomacy in the Early Modern Era」

末森晴賀 北海道大学大学院・博士課程

一日目にあたる本セッションは、「前近代におけるムスリム国家と外交 Muslim States and Diplomacy in the Early Modern Era」というタイトルのもと、前近代におけるムスリム諸国家の外交について扱った。具体的な外交交渉の過程を詳述した研究はすでに数多くの蓄積を見るが、本セッションが意図するところはむしろ、外交関係、さらに言えば「外交」そのものの分析であると言える。

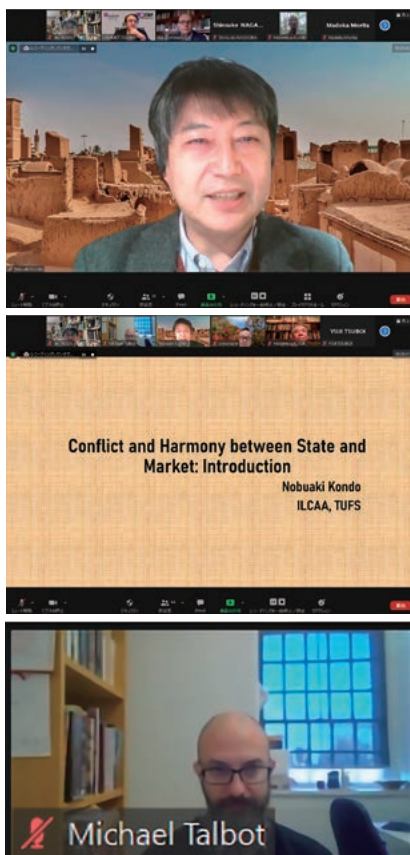
最初に行われた、Michael Talbot氏の“Signs of Sincere Friendship: The Rhetoric and Practice of Trust in 17th and 18th Century Ottoman Diplomacy”と題する報告は、17世紀のオスマン朝ーイギリス関係を中心に、オスマン朝からイギリスに与えられた諸アフドナーメ（オスマン朝が諸外国に対しイスラーム法に則る形で和平や通商

特権を保障した外交文書）上の「友好」に関わる文言を分析し、その変遷から両国間における関係構築のあり方を明らかにしたものである。その中で、オスマン朝とイギリスの間では信頼が「ない」ことを前提にしているというその関係性の特徴が指摘された。

タルボット氏の報告が、ムスリム国家の外交についてムスリム国家と非ムスリム国家との関係という大枠で捉えたものとするならば、ムスリム国家間の宗派の違いに着目したのが近藤信彰氏の報告である。“Theory and Practice of Safavid Diplomacy”と題する氏の報告は、オスマン朝の奉じるスンナ派とは別に、シーア派における外交の理論的な枠組みを探るものであり、サファヴィー朝を例にとって実際の外交のあり方と比較しつつ検討したものである。ここでは、サファヴィー朝には外交の慣習に関する規範が存在するものの、十分に理論化されてはいないことが示された。

これらの報告からオスマン朝ないしサファヴィー朝の「外交」のあり方が明らかになったところで、さらに問われるものがあるとするれば、それが相手側にいかなる形で受容あるいは共有されたのかという点であろう。報告を踏まえての全体の質疑応答では、両報告者に対して、キーワードとなる用語の相手国側における扱われ方を中心に質問が出された。具体的には、オスマン語の「友好」という語句がイギリス側にどのように翻訳されたのか、またサファヴィー朝と他のムスリム諸国との間で外交用語が共有されていたのかといった点についてである。

本セッションを通して、前近代における「ムスリム国家」の外交の特徴が、宗派の違いにも言及されつつ提示されることになった。今後、他のムスリム国家や、あるいはヨーロッパや他のアジア地域の外交のあり方とも比較分析されることで、外交における「ムスリム国家」的な輪郭がよりはっきりとしてくることであろう。



「イスラーム経済学 Islamic Economics」

水澤純人 京都大学

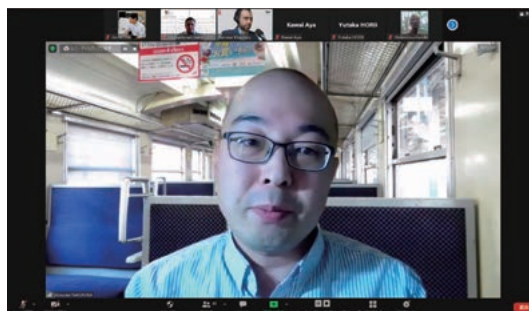
国際会議の二日目は、イスラーム経済に関するセッションであった。冒頭では、本プロジェクトにおいてイスラーム経済の班の代表者を務めている長岡慎介氏が、ポスト資本主義社会への貢献という観点からイスラームの経済実践を検討する意義を解説した。その実践は世界各地のローカルな経済慣行を「イスラーム」的な制度として取り込む一方で、普遍的な価値を有する新制度を生み出してきた。「モビリティ」という言葉で形容できるイスラーム経済の柔軟な適応力は、イスラーム経済の先端をいくマレーシアやイスラーム金融の新たな動向にも見て取れるという。

最初の報告者であるMuhammad Hakimi bin Mohd Shafiai氏は、市場の活力を適正かつ有効に発揮させるためには政府の役割が重要であるという経済学者のジョセフ・スティグリッツの主張を紹介した。マレーシアにおけるイスラーム経済の発展はその主張を裏付けており、ハキミー氏は、聖地マッカへの巡礼費用を拠出する基金の設置(1963年)、利子を取らない商業銀行の発足(1983年)、そして社会金融としての寄進制度(ワクフ)の刷新といった独立以降の取り組みについて、政府の指導力に焦点を当てながら解説した。信仰に適った消費財・サービスを提供するハラール産業の興隆に対しても、多様性の尊重と持続可能な発展という国家計画を踏まえて政府が道筋を付けるべきと論じて締めくくった。

次の報告者であるKhashan Ammar氏は、フィンテックを情報技術を駆使した金融革命と位置付けたうえで、イスラーム法に準拠したフィンテックが求められる現状をはじめに論じた。なかでも暗号通貨は「革命」の象徴であるが、政府による一元的な管理が難しいがゆえに、テロや賭け事といった違法行為の資金源になる可能性も懸念されてきた。アンマール氏は、暗号通貨をめぐる法学者間の見解の相違を指摘する一方で、その技術的基盤(ブロックチェーン)が透明性を高めた迅速な決済を可能にする利点も強調した。寄進財のクラウドファンディングといった慈善事業の活性化はブロックチェーン応用の好事例であり、フィンテックの有効活用に向けて法学者が指導力を発揮するべきと論じて締めくくった。

質疑では、ブロックチェーンに基づく決算のあり方と従来の決算の慣行との相違、マイレージといった暗号通貨以外の仮想通貨の扱い、ハラール商品の標準化をめぐる国家と市場の主導権争いについて活発なやり取りがなされた。また、中世ムスリム社会にも見られた脱中心的な金融業のあり方は、ポスト資本主義の構想に向けた知恵となると指摘された。

質疑では、ブロックチェーンに基づく決算のあり方と従来の決算の慣行との相違、マイレージといった暗号通貨以外の仮想通貨の扱い、ハラール商品の標準化をめぐる国家と市場の主導権争いについて活発なやり取りがなされた。また、中世ムスリム社会にも見られた脱中心的な金融業のあり方は、ポスト資本主義の構想に向けた知恵となると指摘された。



「国家と市場 State and Market」

守田まどか 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

国際会議の最終日にあたる本セッション「国家と市場 State and Market」では、先立って行われた二つのセッションで扱われたテーマを統合し、国家と市場の関係を複眼的かつ包括的に議論することが目指された。

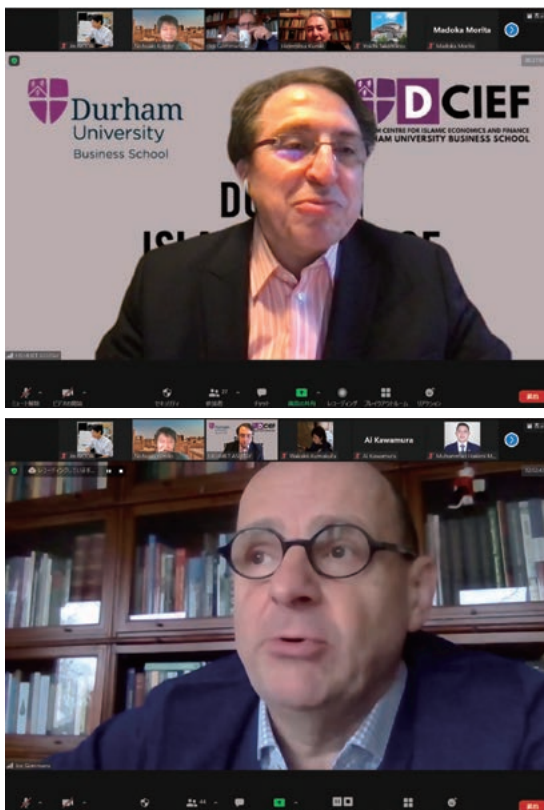
一つ目の報告は、Colonial and Global History プログラムのチェアを務める Jos Gommans 氏 (ライデン大学) によるものであった。“Enter Geography: Archipelago Capitalism in the Indonesian Archipelago” という題目のもと、オランダ植民地帝国史をインド洋海域における長期持続の歴史に統合することが意図され、資本移動や帝国・国家・市場形成を考察するうえでの地理的条件の重要性が指摘された。熱帯性気候に属し、資本主義経済の発達が比較的遅かったインドネシア諸島における近世以降の経済の展開について、

ムスリム国家とポートフォリオ・キャピタリズムの興隆から、オランダ東インド会社による征服後の「オフショア経済」導入、そして植民地支配に至る過程が示された。

二つ目の報告は、Mehmet Asutay 氏 (ダラム大学/同大学ビジネススクール・イスラーム経済金融センター) によるものであった。“Re-imagining-and-re-constituting Islamic Economics through Moral Economy: State, Market and Civil Society” という題目のもと、近代の国民国家建設過程において反覇権的言説として出現したイスラーム経済運動が扱われた。預言者ムハンマドの時代から現代にいたるまでの国家・市場・社会の関係についての壮大な見取り図がモラル・エコノミーの観点から提示された。普遍的イスラームの標榜に対して、国民国家とそれが規定する既存の経済システムに従属している点に、現代のイスラーム金融の葛藤と課題があることが指摘された。

これらの報告を受けて、質疑応答では、歴史学・経済学・地域研究を含む多様な学問領域を横断する議論が交わされた。具体的には、インドネシア諸島の歴史的展開についての他地域との比較可能性や現代の気候変動問題との関連性、イスラーム化とそれがもたらしたムスリム・ネットワークについてのオランダ側の認識、環境問題の商品化とイスラーム金融との関わりなどである。

最後に、本国際会議の共催班である A01 班代表の長岡慎介氏より、閉会の辞が述べられた。「近世ムスリム諸国家の外交」、「近代イスラーム経済」、「近代資本主義とイスラームの相克」にそれぞれ焦点をあてた3日間のセッションでの議論を通して、長い歴史のなかで様々な社会的状況に適応してきたイスラーム文明の柔軟性があらためて浮き彫りになったことが強調された。そしてこの柔軟性は、近代移行期における日本の歴史的経験とも重なるという点において、今後、さらに広い視座に立った比較研究の可能性が提起された。



イスラーム信頼学 エッセー



(2011年、アルジェリア南東部、山本沙希撮影)

イスラーム信頼学プロジェクトは、ムスリムのあいだの水平的な「横のつながり」、すなわち他者との信頼やコネクティビティに焦点を当て、その可視化を図ることにより、対立や分断が強調されがちなイスラームの現代的状況に新たな視座を提示することを目指している。果たして、信頼とは現実の生活のなかでどのように現れるのだろうか。そして、イスラームはどのように関係しているのだろうか。

ここではパキスタンとインドネシアという二つの地域を例に、イスラームに根差したムスリム社会における多様なかたちの信頼の在り方を紹介する。まずパキスタンでの経験をもとに、山根は「アッサラーム・アライクム（貴方たちの上に平安がありますように）」という、ムスリム同士であればどこでも交わされる日常的な挨拶表現が、他言語での挨拶表現とは異なるニュアンスを伴っている点に着目する。英語や日本語の挨拶表現との比較を通して、山根は「アッサラーム・アライクム」という日々の挨拶がムスリムとしての信仰告白および根本的義務であると同時に、相手をムスリム同胞として認め、信頼し、受け入れる行為であると説明する。

続いて高野は、インドネシアの法人類学を専門とする見地から、同国では条文化されている国家法に限らず、様々な慣習や社会通念がその土地の広義の「法」として受容され、人びとの間で実践されていると述べる。高野は、条文化されている国家法と、そうではない慣習法（アダット）とが互いに影響しあい、対立したり、相補的な役割を果たしたりしている位相を提示する。こうして、インドネシアにおける広い意味での「法」の在り方を示すことにより、高野は具体的な場での「法」実践に「信頼」が現れる可能性を見出している。

ムスリム同士で交わされるお決まりの挨拶表現、そして広い意味での「法」実践を捉える二つのエッセーは、ムスリムの日常から信頼を考えるためのヒントを提示する。

山本沙希

アッサラーム・アライクム

ムスリム同士が出会うとき

山根 聡
大阪大学

人は挨拶を交わすとき、頭を差し出したり、握手したり、合唱したり、あるいは肩を抱き合って、武器となる手を使えないようにして敵意のなさを示す。ムスリム同士の挨拶から生まれる信頼とは何なのだろう。

「ご隠居さん、こんにちは」
 「どうした、八つつあん。しばらくだったなあ」
 「どうもすっかりごぶさたしちゃってねえ」
 「たまには遊びにきておくれよ。おまえはお職人衆、あたしは隠居の身の上で、気が合うというのは不思議だなあ、合縁奇縁というかねえ。お前の顔を一目見ないと、なんとなくもの足りなくていけない」
 「どうもありがとうございます。そう言ってもらえるとうれいねえ。あつしもご隠居さんの顔を一目見ねえと、なんとなく通じがなくてねえ」
 「おい変なことを言うんじゃないよ。あたしの顔で通じをつけるってそんなのがあるかい。あいかわらず変わったことを

言う……今日はなにか用でもあって来たのかい？」
 「いいえ、用がありゃあ来やしねえ」
 「おかしいね。用があるから来たというのはわかるけど、用がないから来たというのはどういうわけだい？」
 「用がありゃあその用をしてるもの。用がなくて退屈だから来たんだ」
 「はははっ、正直でいいな。きょうは、やすみかい？」[麻生芳伸編「道灌」『落語百選 夏』ちくま文庫2005, pp.38-39]
 三代目三遊亭金馬師匠が得意とした噺「道灌」の導入部である。編者の麻生芳伸はここに描かれた人間関係について「本当の意味での交流の発芽があるような気がする。今日の人と人の出会い、会話はあまりにも用がありすぎるし、なに



ラーホール旧市街にて、寛ぐオジサンたち (2001年、加藤朗撮影)

かと損得が優先しているようだ」と述べている。会話からすると、この時代でも「用があるから来たというのはわかる」のであって、「用がないから来た」というのは普段とは異なる状況ということになる。

パキスタンを旅していると、昼間から大人がのんびりチャーエを啜りながら歓談したり、あるいは話をしなくてもボーっとしたりしている姿を見ることがある。まさに「用のない」まま集う人々である。筆者は最初「働いてないのだろうか？」と疑問を抱いていたが、次第に「いいなあ」と考えるようになった。「道灌」の導入部は、日本人以外に聞かせるべくすると笑わせ、頷かせる力を持っているような人間関係、すなわちコネクティビティを描いているのではないだろうか。人間関係とは、こうした「用もない時」にも集まっていられる人々のなかにもあることを忘れてはならない。日本人はこれを「縁」と呼び、ムスリムはアッラーの思召しで知り合えた、ということになるだろうか。

人間関係については、わが国では兼好法師の言葉が知られている。

「友とするに悪き者、七つあり。一つには、高く、やんごとなき人。二つには、若き人。三つには、病なく、身強き人。四つには、酒を好む人。五つには、たけく、勇める兵。六つには、虚言する人。七つには、欲深き人。

よき友、三つあり。一つには、物くるる友。二つには、医師。三つには智恵ある友。」[吉田兼好 西尾実・安良岡康作校注『徒然草』岩波文庫1985, p. 199]

これはあくまでも含蓄ある個人的見解だが、ムスリムの場合、友とする条件についてどう規定されているのか。ハディースを見ると、いくつかの言及が見られる。

「アブー・フライラは、アッラーの使徒から次のように聞いたと伝えている——ムスリムには他のムスリムに対して、五つの権利があります。サラームの挨拶への返礼を受けること、病気見舞いをしてもらうこと、葬儀に参列してもらうこと、招待に応じてもらうこと、くしゃみに声かけしてもらうことです。」[小杉泰編訳『ムハンマドのことば ハディース』岩波文庫2019, p. 237]

「アブー・シュライフ・カアビーは、アッラーの使徒が次のように述べたと伝えている——アッラーと終末の日を信じる者は、よいことを口にするか、そうでなければ黙っていなさい。アッラーと終末の日を信じる者は、隣人を大切にいなさい。客の歓待は一昼夜[が努め]であり、客としての期間は

三日間です。それを越えたものは[主人からの任意の]喜捨であり、客は重荷になるほど滞在してはいけません。」[同書, p.245]

「アブー・ザッルは、次のように伝えている——わが友[ムハンマド]は、私に七つのことを命じました。[すなわち]困窮者たちを愛し、彼らに近づくこと、下の者を見て、決して上の者を見ないこと[羨まないこと]、子宮のつながり[血縁者との関係]を大事にすること、誰にも何も乞わないこと、たとえそれが苦い場合でも真実を語ること、神については[常に真実を語り]非難する者の非難を決して恐れないこと、「アッラーによるほか、いかなる力もなし」と数多く唱えること、これらを彼は私に命じました。これらは[神の]玉座の下にある至宝です。」[同書, pp. 302-303]

イスラームの場合、ハディースのことばは預言者ムハンマドに由来するものであるから、個人的見解といった話ではない。それでも兼好法師同様、「弱きを助け、強きをくじく」姿が推奨される点は共通している。では、兼好法師の例をムスリムに話してみたらどうなるだろう。同僚のパキスタン人は、「それはハディースにもある」と返してきた。個人的見解ではなく、行動規範であるクルアーンとハディースに基づいて、彼らは正しい道を進むのである。

ムスリムの行動規範の根幹である五行の最初に挙げられる「シャハーダ」は、「アッラー以外に神はなし」「ムハンマドはアッラーの使徒である」と告白することを根本的義務としている。信教の自由が保障される現代の多くの国家においては信仰が個人的なもので、これを尊重し、干渉することは個人の自由を侵害するものと考えるなか、ムスリムはこのシャハーダを公然と唱える。かくしてムスリムは、他のムスリムのことを、同じ義務を負う者として相手を認め、あるいは信頼して、受け入れる。この確信的行為が、他のムスリムとの同胞意識、あるいは信頼を育むのではないだろうか。

ムスリムが非ムスリムと挨拶を交わすなら、「ハロー」や「こんにちは」もあるだろう。だが、挨拶への返礼を受けることが権利となっているムスリムは、「アッサラーム・アライクム」と言い合うことでムスリム同胞としての権利を認めることになるのではないか。筆者はこの挨拶を単純にムスリムへの挨拶とだけ考えて使っていたが、シャハーダのような行為に思えてきたのである。

「信頼」と法人類学

高野さやか
中央大学

法は他者との信頼構築においても重要な役割を果たしている。
法人類学は、法がどのように人々の実践のなかに現れ、
どのように支えられているのかを明らかにしようとしてきた。

私は法人類学（英語では legal anthropology）という学問領域を専門としている。これは文化人類学の視点から、フィールドワークを主な研究手法として法と社会について考える分野である。広く世界各地の多様な社会とそこで暮らす人々を研究対象とし、たとえば、人々が法をどのようなものとして捉えているか、もめごとが生じたときにどのように法が利用されているか、あるいはされていないか、といった問題を議論してきた（なお、法人類学というと海外ドラマで犯罪捜査に協力するイメージがあるかもしれないが、そちらは英語では forensic anthropology と呼ばれる、別の学問領域である）。

法とは何か、というのがそもそも大問題だ。法という言葉からまず思い浮かぶのは、憲法・刑法・民法など、国家による後ろ盾のある「国家法」かもしれない。けれども、社会の

なかで機能しているルールには、特に条文のかたちになっていなくてもその社会のなかで受け入れられ、秩序の維持やもめごとへの対応などに役立ってきたものが多い。それらは「慣習法」「社会通念」「条理」などと呼ばれ、他者との信頼構築においても大きな役割を果たす。法人類学は、国家法だけでなくこうした慣習法などもふくめた「法」と社会の関係に注目してきた。

私がフィールドワークを行ってきたインドネシアは、こうした観点から見て重要な研究対象である。インドネシアはかつてオランダによる植民地支配下にあったが、インドネシア共和国としての独立後も、国家法の大部分において植民地時代に制定されたものが効力を持っている。たとえば、民法や刑法といった重要な法典も正式な表記にはオランダ語を用い



メダン地方裁判所外観（2006年、高野さやか撮影）



メダン地方裁判所内部の様子(2006年、高野さやか撮影)

る。他方で、インドネシア国内には民族集団が200以上存在するといわれ、それらの民族集団の慣習法(アダット)の影響力も、長く続いたスハルト政権の崩壊後、再び強まっている。特に森林などの資源管理においては、慣習法に基づく共同体の権利が尊重される傾向が指摘されている。さらに、国民の9割がムスリムであることから、結婚や離婚、相続、慈善事業といった領域でイスラーム法が参照されることになり、宗教裁判所の管轄となっている。

こうした状況を背景として、私は北スマトラ州メダン市の地方裁判所を主なフィールドに、国家法、アダット、イスラーム法の併存と相互関係についての調査を行った。これまでインドネシアを対象とした多くの研究が注目してきたのは、司法制度の腐敗と、それを受けての人々の司法不信、そして慣習法の専門家が中心となつての話し合いが、固有の問題を抱えつつも重要な役割を担っている様子であった。こうした研究は、条文のかたちをとっていない慣習法の内容がどのようなもので、また慣習法に基づいてもめごとがどのように処理されるのかを明らかにしようとしてきたのであって、地方裁判所は登場したとしても「関わらないに越したことはない」場所である。

しかし訪問してみれば、地方裁判所には日々多くの人々が出入りしており、言うまでもなく、勤務する人々にとってそこは日常生活の一部である。人口200万人を超える地方都市には多様な背景を持つ人々が住んでいて、アダットが慣習法として人々に共有されているとはいえない。どのような問題を扱っているかといえば、窃盗や麻薬関連の刑事事件、それから正式な離婚のために必要な手続きとしての離婚裁判(ムスリムではない人々が対象)、賃貸契約・土地所有・売買契約についての民事事件といったところである。

もちろんインドネシアの司法制度に改善すべき課題がないわけではないのだが、これらの事件を扱うにあたって「法」はさまざまなかたちで現れていた。たとえばそれは、険悪になってしまった夫婦に個人的経験からのアドバイスを与える裁判官の発言だった。また、アダットに基づく土地の権利を、植民地期の契約書という司法制度の枠組みに依拠しながら認めてもらおうという訴訟当事者の試みについても知ることができた。

この調査からは、「もともと慣習法があったところに西洋起源の国家法が持ち込まれ、その結果、表面的には慣習法が影響力を失ったかにみえるが、依然として人々のあいだでは

共有されている」といったイメージとも異なる法のあり方が見えてきたのである。それぞれの法に関するカテゴリーは、相互に参照しあつたり、対立したり、あるいは相補的な位置を取つたりしながら、そのあり方を変容させ続けているのだ。

だとすれば、国家法=法学、慣習法=(法)人類学、という従来の棲み分けを再考し、法が実践のなかでいかに生み出されているのか、に目を向けていく必要がある。科学の人類学で知られるラトゥールは、フランス行政最高裁判所でフィールドワークを行い、法をすでに存在している「体系」としてではなく、様々な専門家による実践や具体的なモノや文書などによるネットワーク構築の過程として捉える視点を提示している。こうした具体的な場における実践から法を捉える視点を、インドネシアにおけるより広い意味での法、さらには信頼へと拡張していくことは、この研究プロジェクトにとっても意義のあることだろう。

また、信頼を考えるうえで、近年盛り上がりつつある「法と感情」研究の視点も参考になるだろう。法学ではこれまで感情を、法の客観性・中立性を損なうものとして、ネガティブに捉えてきた。たしかに、個人の主観で刑罰が決まるようなことがあつては困る。しかし無感情な裁判官によって裁かれたり、無感情な議会によって法律が定められたりするもの、それはそれで問題なのではないだろうか。そもそも、そんなことは実際にあつたのだろうか。法と感情は、本当に切り離せるのだろうか。「法と感情」に注目する研究者は、怒りや悲しみ、共感や正義感といった感情こそが、人々の関係性、さらには慣習や法制度を生み出し、また変化させていく原動力となつてきたのではないだろうか、と問いかける。

これは西洋近代法的问题関心であつて、イスラーム法学の視点からは目新しい論点ではないかもしれないが、この「法と感情」研究の蓄積とも接続しながら、法と信頼のあり方がどのように方向づけられているのか、社会的な実践のなかで法と信頼とがどのように姿を現しているのか、フィールドワークを通じて少しずつ迫っていききたい。



森まゆみ

『お隣りのイスラーム ——日本に暮らす ムスリムに会いに行く』

(紀伊國屋書店、2018年)



日本各地に暮らすムスリムの日常生活や考え方を生き生きと伝える一冊である。著者は、地域雑誌『谷中・根津・千駄木』(1984～2009年)の編集人、エッセイの名手である森まゆみさん。300ページ近いボリュームがあるが、楽しく読み通すことができる。

子島 進 東洋大学

2011年の東日本大震災に際して、森さんは大塚モスクのムスリムと一緒に被災地支援に行っている。「これからいわき(福島県)に行くけど、あなたも乗ってく？」と気軽に誘われた体験が、森さんをぐっとムスリムに惹きつけたのだった。その記録を見た紀伊國屋書店から、同社の季刊誌に「日本で暮らすムスリムの生き方や考え方について書きませんか」というオファーが届く。その求めに応じて、森さんは13人(12カ国)の在日ムスリムを訪ね歩き、先入観なしに、その人の言葉に耳を傾けてきた。その一連のインタビューをまとめたのが本書である。

まず、文字通りのお隣さん、ご近所に暮らすムスリムから、森さんのインタビューは始まる。トップバッターとして登場するクレイシ・ハールーンさんは、森さんが一緒に被災地支援を行ったマシド大塚(マシドはモスク、つまりイスラームの

礼拝所である)の事務局長である。二番手のサダットレザイ・モハメッドアリさんは、谷根千エリアでレストラン・ザクロを経営している。

谷根千エリアは、私が勤務する東洋大学の白山キャンパスから、そんなに遠くないところにある。そして、この二人のことは直接知っているのだが、森さんの文章は、本当によくご本人の特徴や語り口をとらえたものとなっている(大塚モスクと東洋大学は10年にわたって交流をつづけているし、二番手のアリの娘さんは、以前私のゼミ生だった!)

森さんには『おたがいさま』(ポプラ社、2011年)という著書がある。地域コミュニティに根ざした相互扶助の大切さを体験に根ざしてつづった本だが、私は日本各地に暮らすムスリム・コミュニティのリーダーたちが「ご近所を大切にするのが、イスラームの教え」と繰り返し口にするのを耳にしてきた。「ご近所とおたがいさま感覚」が両者の共通点となっているのだが、イスラーム信頼学を進めていくうえでも、大いに参考になるだろう。

森さんがすごいのは、つてをたどって、意識的に「まだ会ったことのない国のムスリムへ、さらにその先へ」と、どんどん進んでいくところである。わあ、日本にこんな人たちがいるんだと、びっくりさせられる経歴やエピソードをもつ人が次々に登場する。私のお気に入りには、ティニ・コドラットさんとモハメッド・ブリさんである。インドネシア出身のティニさんは舞踊家、そしてチュニジア出身のブリさんは、サウジアラビア大使館勤務のかたわら、なんと沖縄民謡歌手として活動している。この本には、このほかにもマレーシア人のジャズ歌手や日本人のアラビア書道家が登場する。イスラーム信頼学でも、ムスリムの多様性を示すのに、出身国だけではなく、活動の多彩さにも注目して掘り下げていけば、彼ら彼女たちが築いているネットワークのありようが、これまでと違う角度から見えてくるのではないだろうか。

好奇心も行動力も旺盛な森さんは、日本でムスリムへのインタビューをつづけるうちに、中東へ行ってみたくなる。そして、実際にドバイとトルコに出かけている。とりわけ興味深いのが、ドバイで日本人のIさんが始めた真珠養殖である。日本人がアラブ人とパートナーシップを組み、アルジェリア人やフィリピン人を雇用して行った事業は、どのような形で当該ビジネスのネットワークに参入していったのだろうか。残念ながら、この事業はその後うまくいかなかったと追記されているが、そのユニークな試みが記録として残された意味は大きい。イスラーム信頼学が学ぶべきもう一つの点として、「日本人がムスリムのネットワークに参入し、信頼を勝ち得た(あるいは信頼を得るのに苦労している)ケーススタディー」を取り上げるのも面白いだろう。

〇〇に 埋め込まれた信頼

そこに信頼やコネクティビティがあるということは、どうやって推し量ることができるのだろうか？今回は、二つの事例から、この問題を覗いてみたい。

一つ目は、「中国革命の父」として知られる孫文が、ハサン波多野に宛てた書である。野田はこの書を切り口に、汎イスラーム主義やアジア主義などさまざまな主張が唱えられた激動の時代の中で、「信頼」がどのように表象され、マスメディアに顕れたかについて論じる。

二つ目は、カトリック勢力の要衝マルタ島に残された裁判記録である。マレットは、この中に登場する人物のあいだのコネクティビティを描きだす。そこには、ムスリム捕虜が魔術業の商いを通じて築いたビジネスネットワークの存在と、顧客を結ぶ商売の仲介役としてのキリスト教徒の存在があった。

二つの議論は場所と時代は異なれど、いずれも非ムスリム社会のなかで展開されるコネクティビティや信頼の創出を扱うものである。いかにしてムスリムのコネクティビティが水平方向に展開していくかについて、多くのヒントが得られるに違いない。

佐藤 将



ポンペイの聖母教会 (2019年、マルタ、アレクサンデル・マレット撮影)

雑誌に埋め込まれた信頼

野田 仁 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

20世紀初頭の日本において、汎イスラーム主義やアジア主義などさまざまな主張が飛び交うなかで、ムスリムたちが信頼構築に寄せていた期待は、どのような形でマスメディアに顕れただろうか？

こちらの書をご覧ください。孫文が揮毫したものであることはすぐにお分かりいただけるでしょう。「博愛」です。孫文がたびたび日本を活動の場としていたことはよく知られていますが、この書もそのような日本滞在時のものであることは想像に難しくありません。では、孫文はどのような意図で博愛と書いたのでしょうか。実は、私の目的はそこにはありませんし、よくわからないと言った方が良いでしょう。ここで問題にしたいのは、宛て先の「波多野先生」がこれをどのように受け止めたのかという点です。

この人物は当時（1913年）、ハサン波多野を名乗るムスリムでした（本名の波多野春房としてはまた別のかたちで知られているのですが、ここでは省略します。「烏峰」の号でも知られています）。自身でも「日本に於ける最初のモスレム」と書いているぐらいで、日本人としてはかなり早い時期に

改宗した人物であることは間違いありません。彼がどのくらい信仰に篤かったかはよくわかりませんが、インド出身のムスリムであるムハンマド・バラカトゥッラと知り合い、バラカトゥッラが東京で発行していたプロパガンダ雑誌『イスラミック・フラタニティ』にも、自身の改宗式の様子も含めて登場しています。この雑誌は、世界中に読者を獲得し、イスラームとその同胞的な宗教（一神教であるキリスト教その他を想定しています）の信徒の間に“Fraternity”を育むことを目的としました。フラタニティは「友愛」などとも訳される単語です。バラカトゥッラの論説は同時代の和文雑誌（『大東』など）上でも翻訳が掲載されていましたが、そこで使われていたタイトルは『回教同胞主義』でした。

この雑誌の刊行の背景としては、当時の世界情勢を考える必要があります。バラカトゥッラが英国によるインド支配に異議を唱えていたことから明らかのように、この雑誌は反帝国主義的な主張を明確に持ち、それはイギリス当局からすれば、反英プロパガンダに他なりませんでした。イギリスの圧力もあり、この雑誌は日本政府からも取り締まりを受け、最後は廃刊となってしまいま



孫文からハサン波多野宛ての書「博愛」（El-Islam vol. 2, no. 3-4, 1913年、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所蔵）

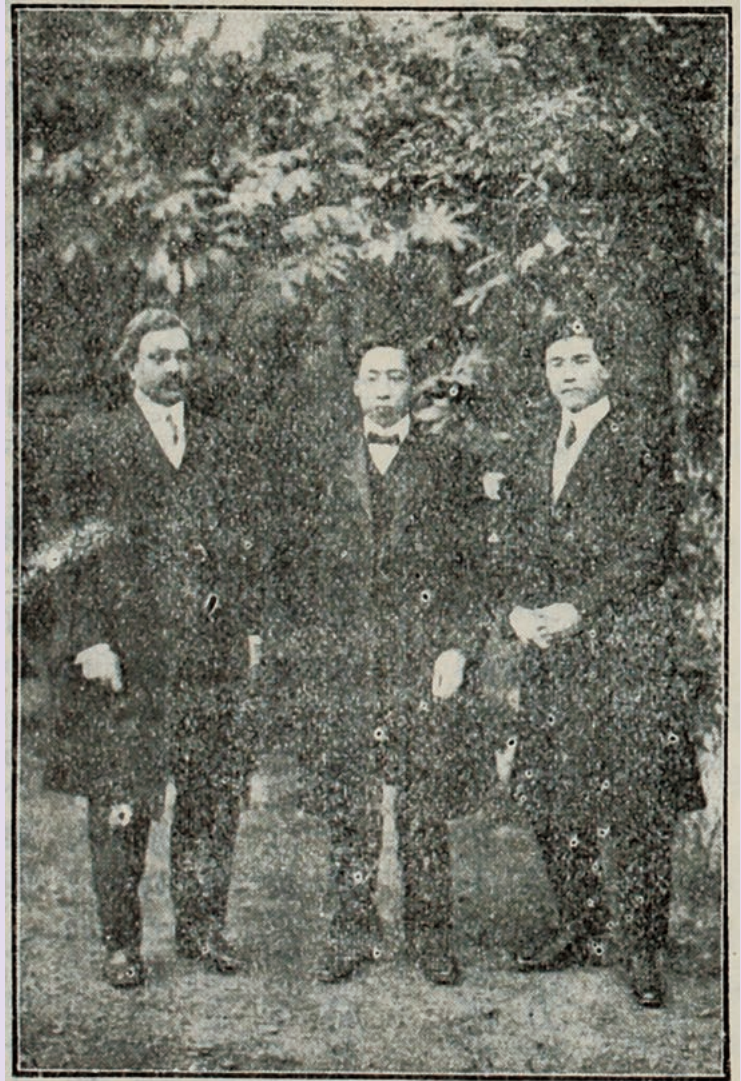
す(1912年9月)。

それを受けて、ハサン波多野が編集人となって新しい雑誌を刊行しました。その名も『イスラム』(日英バイリンガルで英文タイトルはEl-Islam)という新雑誌に、ここで取り上げた孫文の書が掲載されているのです。先に結論めいたことを書いてしまいますと、波多野がこの書に“Fraternity”のキャプションを付けていること、つまりフラタニティ=博愛とみなしていることに注目すべきだと考えます。『イスラミック・フラタニティ』誌も『イスラム』誌も、しばしば人類愛や兄弟愛を掲げ、反植民地主義的論調を示すわけですが、それら全体を包み込む言葉としてフラタニティ、すなわち「博愛」の語があると考えられるからです。ただし、元々のバラカトゥッラの思想というよりは、日本側の最前線でそれを受け止めていたハサン波多野の解釈だということにも注意するべきでしょう。

それでは、波多野はなぜ孫文と関連付けて、この語を掲載したのでしょうか？孫文の書が掲載された号は、1913年4月に刊行されました。中国で辛亥革命による新政権が成立した時期と、第一次世界大戦開戦のちょうど間にあることにすぐ気が付きます。彼の書が書かれたのも、おそらく刊行直前の1913年2月のことだと思われます。このとき波多野は、バラカトゥッラとともに孫文に面会していたからです。

当時の日本において、中国の革命の推移は重大な関心事でした。アジア主義を唱え、革命派支援に積極的にかかわろうとした知識人も少なくありません。波多野はこのアジア主義の系譜に明確に位置づけられていたわけではありませんが、彼が「日支同盟は亜細亜大合同の先決問題なり」と『イスラム』誌(vol. 2, no. 3-4, 3)の中で述べていたことから、波多野の関心もまた日中関係や中国問題にあったことは明らかです。つまり、日本が介在する形での中国革命の進展、アジア合同を果たす役割における孫文への期待が示されていると考えられます。

もちろん上のような意味での「アジア合同」は、



向かって左から順に、バラカトゥッラ、胡瑛(孫文とともに革命派として活動、このとき新疆青海屯墾使)、ハサン波多野(El-Islam vol. 2, no. 3-4、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所蔵)

あくまで日本目線からのアジア主義の投影に他なりません。それを勝手に「博愛」と結びつけられても孫文も困るでしょう。波多野の意識も、誌名とは裏腹に、世界各地のムスリムに向けられていたわけではなかったようです。それでも、波多野の孫文に対する思いは、信頼構築のあり方の一断面であり、ややいびつな博愛観で世界をとらえようとしていた波多野の言説もまた、政治的な状況に左右されがちなイスラームと信頼の問題を考える上で一つの材料を提供してくれると考えています。

くわしくは近刊『近代日本と中東・イスラーム圏：ヒト・モノ・情報の交錯から見る』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2022年3月)所載の拙稿「プロパガンダ誌『イスラミック・フラタニティ』とその後継誌をめぐる日本側の事情」もご参照ください。

捕虜コミュニティにおけるコネクティビティ 17世紀初頭のマルタにおける魔術業ネットワーク

アレクサンデル・マレット

早稲田大学

訳：末森晴賀

地中海の要衝マルタ。そこに残る、250年分の裁判記録には、捕虜として島に抑留されていたムスリムたちが築いたネットワークが埋め込まれている。その結びつきをつくりだすのは、何を隠そう魔術業であった…。

17世紀初頭の地中海は、敵対し合う二つの勢力が覇権を争う主要な舞台であった。地中海の南岸と東岸を支配していたのは、強大なオスマン帝国とその同盟国である北アフリカのムスリム国家であった。対する北岸には、スペイン、ポルトガル、フランス、イタリアといったキリスト教ヨーロッパのカトリック諸国が存在していた。そして、その最前線に位置していたのが、カトリックの島であるマルタであった。

会戦のような全面的な衝突はめったに見られなかった一方で、双方ともに地中海のあちこちで小規模な掠奪活動を行っていた。彼らは大型船に乗って敵の船舶や沿岸地域を掠奪し、戦利品という形で莫大な物質的富を得た。そうした中、最も高価な商品は人間であり、15世紀から19世紀に

マルタのグランド・ハーバー。捕虜はここから島内に連行された。(2019年、アレクサンデル・マレット撮影)



かけて、何百人もの人が双方の私掠船 (corsair) によって捕虜にされ、敵地で生きることを余儀なくされたのである。

マルタにはおよそ2,000~4,000人のムスリム捕虜のコミュニティが通時的に存在し、そのほとんどが男性であった。彼らの一部は島の政府の所有となった。大体の者が交易やムスリムに対する掠奪を行うガレー船の漕ぎ手にされたが、そのほかの者たちは島での労役を課せられて、今日もなお首都のヴァレッタに残る巨大な建物の建造に従事させられていたのである。

捕虜たちはヴァレッタの中心にある巨大な牢獄で暮らしていた。政府の労役がないときは日中の外出を許可され、日没には牢獄に戻るようになっていた。このような生活環境により、彼らは互いに懇意になったり、他の捕虜やマルタ社会の住人らと様々なつながりやネットワークを築いたりすることができたのである。それは散髪や油の販売、病気の治癒など、許可されていたささやかな仕事を通して行われた。ところが、彼らは時に不法行為、とりわけ魔術に手を染めることもあった。ムスリム捕虜の魔術師たちは、自らの商いの顧客を得るために、今いる新しく、異質で、時に敵対するような環境の中で複合的なネットワークを築いていったのである。

この事実は、キリスト教徒の島民のみならず多くのムスリム捕虜が、魔術を行ったとして弾劾され、宗教上の不法行為を調査するために設立されたローマの異端審問所に連行されたために知られることになった。マルタの聖堂文書館 (Cathedral Archives) には、実に250年近くに及ぶ裁判記録の大部分が今なお残されて

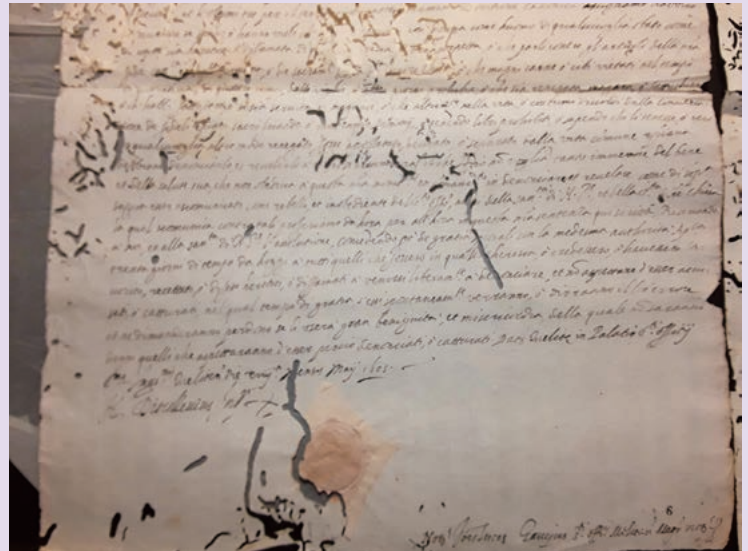
1605年付の布告。あらゆる魔術行為は全て異端審問所に報告すべきことを命じている。
(マルタ、イムディーナの聖堂文書館提供)

いる。これを通して、ムスリム捕虜が島で築いたコネクティビティ・ネットワークの存在が明るみになり、それが何故、どのように構築されたのかがわかってきた。数年前、私はとある文書を研究し始めた。これは1605年における事例の記録であり、カイロ出身のセッレム (Sellem) という名前のムスリムが魔術を行い、島のキリスト教徒住民に教えた咎で裁判に掛けられたことについて記されているのである。

この文書から、セッレムが自らの魔術業を拡大させるために築いたネットワークの存在が明らかになった。例えば、最初の証言者たちの一人であるベルト (Berto) という名のキリスト教徒は次のように述べている。自分は病気を抱えていたが、キリスト教徒の医者ではそれを治すことができなかった。そこで、助けてくれそうなムスリムの医者を見つけに捕虜の牢獄に行ったところ、代わりにある者からセッレムのところに行くことを勧められた。何でも、セッレムであれば病気の治癒にもっと効き目のある魔術療法を施すことができるから、と言うのである。

同様の事例は、ディオニシオ (Dionisio) と呼ばれる島民の証言にも見られる。彼が言うには、セッレムが彼のためにいくつか魔術を行った数日後に、別のムスリム捕虜が彼の家を訪れて、さらに未来予知などの魔術を披露すると申し出たらしい。状況を見るに、セッレムが、ディオニシオは望みを叶えるためであれば魔術に金を出すことを厭わない人物であると、名も知れぬ別の捕虜に教えていたことは明らかである。これらの証言から、どうやらセッレムは捕虜の牢獄も含めたビジネスネットワークを築いており、他のムスリムたちに協力してもらって代わりに、彼自身もまた彼らの利益になるよう手助けしていたらしいことが見受けられる。

時とともにそうした話は少しずつ人から人へと伝わり、噂話となって、やがてセッレムの魔術師としての評判は島中の「共通認識」へと高まったのであった。このことは、前述のディオニシオが街角の噂からセッレムの魔術師としての能力を聞き



知ったと主張していたように、彼のビジネスネットワークを広げるうえで重要な役割を担ったであろう。

しかしながら、セッレムのビジネスネットワークの中にはムスリムだけでなく、キリスト教徒も存在した。このことはとりわけ、文書の冒頭部分にある、最初の4人の証言者のうち3人の供述からはっきりと見て取れる。どの事例でも、証言者はキリスト教徒の知人を通してセッレムと接触したと述べており、彼らのいずれもがその知人から、セッレムが魔術を行えると聞いていたのであった。

これらの事例からは、セッレムが自分の商売を広げるためにあえてキリスト教徒のネットワークを作ったのか、あるいはもっと単純に、彼に関する市井の共通認識によって結果的にそのようなネットワークが生み出されただけであったのかははっきりしない。とは言え、彼が少なくとも一人のキリスト教徒を意図的に自分のビジネスネットワークに引き込んでいたのは確かである。

このことは、裁判の最初にセッレムを告発した4人のキリスト教徒のうち、最後の一人の証言に見られる。ジュゼッペ (Giuseppe) という名前のこの人物は次のように述べている。彼は、セッレムのいる牢獄の守衛であるフランチェスコ (Francesco)

裁判記録の一頁。セツレムがキリスト教徒の客につけた稽古の様子を示している。
 (マルタ、イムディーナの聖堂文書館提供)

という知り合いのキリスト教徒のマルタ人に熱烈に勧められて、魔術を行ってもらうためにそのムスリム捕虜、すなわちセツレムのもとを訪れた。セツレムの魔術が失敗すると、ジュゼッペはフランチェスコのところに引き返して、セツレムが詐欺師であり自分を騙していることを知りつつ隠していたと言って彼を責め立てた。それでもフランチェスコはその捕虜が施す治療の効能があることを訴え続け、しまいには自分がジュゼッペの代わりにセツレムのところに行ってもう一度呪文を唱えてくれるよう聞いてみるとまで言い出した。ジュゼッペは言われる通りにしたものの、結局失敗に終わった。その時初めて、彼は二人に騙されていたことを悟ったのであった。この事例からは、セツレムがキリスト教徒のフランチェスコを自分のネットワークに引き込み、フランチェスコはセツレムの口利き役として他のキリスト教徒たちに彼の魔術を売り込んで幾分かの見返りを得ていたであろうことが浮かび上がってくるのである。

セツレムのネットワークにおける最後の登場人物は、ピエトロ・ラ・レ (Pietro La Re) という名前前のマルタ政府の高官である。ピエトロは数年前に遡るいくつかの出来事を話していく中で、セツレムを中心とした魔術に関する広いネットワークの存在について語った。その中でピエトロは、他の政府の要人であるコルバット (Corbat) がカーシム (Chasem) という名のムスリム捕虜と懇意であることについて述べている。すなわち、コルバットはピエトロをカーシムに紹介し、カーシムが二人を彼の師と思しきセツレムに引き合わせたのち、彼らはいっしょに未来を見るための呪文を唱えたのであった。

ピエトロの証言は、異なる社会階層のムスリムやキリスト教徒が互いを魔術に関する目的のために紹介し合うような、セツレムのネットワークの性格を的確に捉えたものになっている。それはまた、彼のネットワークが政府の上層部に至るまで広範囲であったことも示している。とは言え、彼のネットワークは捕虜のものとしては少しばかり巨大に



なり過ぎた。結局、彼は当局によって裁判にかけられ、有罪とされ、処罰されたのである。彼が長い時間をかけて築いたネットワークは一瞬にして崩れ去り、彼の商いも終焉を迎えたのであった。

セツレムの裁判記録に関する研究の詳細については、最近出版された以下の著書を参照されたい。

A. Mallett, C. Rider and D.A. Agius (eds), *Magic in Malta, 1605. The Moorish Slave Sellem bin al-Sheikh Mansur and the Roman Inquisition* (Leiden: Brill, 2022).

シビルダイアログ・キャラバン 「動物がつなぐ世界」報告

太田(塚田) 絵里奈

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

総括班の企画として、
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、
世田谷代田 仁慈保幼園と共催で、
シビルダイアログ・キャラバン企画「動物がつなぐ世界」
(2021年10月18日～11月14日)を実施した。



会場レイアウト



【ポスター図版出典】

「唐蘭船持渡鳥獸之図」慶應義塾大学所蔵 (18～19世紀)

Harff, Arnold, Ritter von, *Reisebericht*, Bodleian Library MS. Bodl. 972 (16世紀)

「普賢菩薩像」慶應義塾大学所蔵 (13世紀)
Sebastian Münster, *Typus Orbis Universalis*
(based on Ptolemy's World Map) (16世紀)

1. 企画立案にあたって

イスラーム信頼学において、学術成果の社会への還元を目指す各企画は「シビルダイアログ・キャラバン」と呼ばれる。シビルダイアログ(市民対話)は、一般には行政と市民が対話を重ねることで、多様な価値観を施策に反映させる意思決定の過程を指すが、信頼学では、成果還元を一般の方々との対話形式で行ない、かつ「キャラバン」として実施場所を変えることで異なる意見を取り入れ、精緻化を目指すという意図からこの語を採用している。

今後さらなる国際化と少子化により厳しさを増す我が国の研究環境のなかで、特に若手研究者にとっては、研究の魅力に社会に発信し、その価値を広

く認知してもらうことが求められる。他方、地球規模での格差拡大のなかコロナ禍を経験し、「分断の時代」と呼ばれる今こそ、人類が培ってきた「生き残り」のための英知に学ぶ必要性が増している。そして「学術変革領域研究」の名の通り、これまでの学術の在り方自体を揺さぶるような、思い切った方法論を試みるのが信頼学の使命でもあるという思いから、総括班のシビルダイアログ担当として、本企画を提案した。

2. 「前代未聞」を具体化する

本企画は場所・対象の双方において、全く新しいチャレンジであった。信頼学の各イベントは水平方向の対等な関係性という観点から、共催とする原則をとっている。したがって、「パートナー」選びがシビルダイアログ成功の鍵を握っていた。

我々が協力を仰いだのは、世田谷区の認可保育園であった。世田谷代田 仁慈保幼園(妹尾正教園長)は、下北沢駅から世田谷代田駅に至る線路跡地を利用して2020年4月に開園した。当園は線路跡地一帯の再開発コンセプトである「地域共生」の拠点として、コミュニティスペースやギャラリーが併設され、二名の地域コーディネーターが常勤するなど、設立経緯、運営体制ともにユニークな保育施設である。そして何より、「地域とのつながりに学ぶ」という、信頼学と共通する保育方針のもとに運営されている。そこで、企画の構想段階で共催を打診したところ、ご快諾いただくことができた。

具体化のプロセスは、総括班の若手メンバーと各班の有志研究員を中心に、現地視察を経て「作業部会」を結成し、

シビルダイアログ「動物がつなく世界」企画全体のイメージ



企画のコンセプトに関する議論を交わすことからスタートした。「動物と地中海史」というテーマは企画者自身の案であったが、当初は全体のコンテンツの一部と考えていた。だが作業部会を通じ、研究者がそれぞれ専門とするフィールドを「異文化」として紹介してしまっは、信頼学の掲げる「世界の分極化・分断化の解消」という命題からむしろ乖離してしまうという懸念が寄せられた。そこでテーマを「動物」に絞り、対象を日本も含む世界へと広げ、信頼学としての見せ方を模索すべきという結論に至った。動物に関しては自然科学的アプローチのほか、人との関わりをとっても環境学やSDGs的視座もあるなかで、歴史・地域研究者ならではの切り口で動物を介した人や国家のつながりを提示するという方向

性に集約されたところで、「動物がつなく世界」という企画全体のタイトルが決定した。

3. 「なんで？」から生まれる新しい世界

企画内容をめぐっては、第一に双方向性のあるイベントを目指した。すなわち最初から完成形を提示するのではなく、来場者が参加することでコンテンツが増え、足を運ぶたびに新しい発見があるという仕掛けづくりである。加えて、自ら学びを広げる機会を提供するという立場から、パネルは絵本風の体裁を取りながらも完全に子ども向けとはせず、解説を充実させ、子どもが発する疑問に大人が答えることで、新たな気づきや学びを引き出す構成を心掛けた。

また、新型コロナウイルスの感染者が増加していた時期でもあり、換気効率を念頭においた動線作りも重要であった。混雑を避けるため、親子講座は事前申し込み制による人数制限を設け、パネル解説文を冊子として持ち帰りできるようにした。

本企画は①在園児向けワークショップ（「りなたすってなんだ?」）、②親子講座（おはなし会）、③パネル展示（「動物がつなく世界」）、④参加型企画（ハンズオンスペース・大型地図「みんなでつなく世界」）という四本立ての構成をとった。

①在園児向けワークショップ（10月18日、22日、3クラス）では、15世紀のドイツ人巡礼者アーノルト・フォ

在園児向けワークショップ作品



ハンズオン・スペース



会場の様子 (11月6日)



ン・ハルフのエルサレム巡礼記にみえる中東・アフリカの動物を紹介しつつ、断片的な文字情報に基づき、未知の生物を創作した。

②親子講座(7日:在園児とその家族、13日:一般向け)では、動物の国家間移動を通じた信頼構築・動物学誕生史と、疫病、疾病観を取り上げた。そしてこれらの「おはなし」を通じて得た気づきや関心を、続くワークショップで発展させる形式をとった。

③パネル展示(11月1日~14日、土日に一般公開)は、前近代期の動物観(「未知の生物との出会い」)、動物を通じた外交史(「贈り物としての動物」)、動物の商取引史(「商品としての動物」という三つの観点を軸に、「絵解き」として動物の絵画的表現の時代的相違、美術作品に描かれる異国の動物の史的背景を解説した。

④参加型企画(ハンズオンスペース・大型地図:10月18日~11月14日)は、自ら学びを広げる空間と位置づけ、関連図書、スマートフォンアプリを通じて地理情報等のデジタルコンテンツを表示させるAR地球儀などの資料のほか、動物を描いた写本挿絵と現代的表現との比較を意図した塗り絵を設置した。大型の世界地図は、来場者に生き物に関するエピソードや調べた内容を各所に貼ってもらうことで、経験や学びを共有してもらう空間とした。

4. 企画を終えて

本企画は来場者の参加によって完成形へと向かうため、当初は不安もあった。だが保育園の先生方と会合を重ね、



世界地図「みんなであつなく世界」

展示方法への助言や企画運営・広報面での大きなサポートをいただいたことで、親子講座は早期に申し込みを締め切るほどの盛況で、一般公開の四日間を通じ、1300人近い来場者があった。会場が子どもたちの瑞々しい感性から生まれた作品に彩られ、来場者のメッセージカードによって地図が埋められた最終日が最も充実し、撤収が惜しまれるほどの状態であったことは、当初の狙い通りの成果といえるだろう。

来場者アンケートでは、「身近な存在を「つながり」という視点で考察するテーマが新しかった」、「本格的な展示・解説内容で大人も楽しめた」など、テーマ、構成双方に好意的な意見が多く寄せられた。保育施設を舞台としつつも、来場者には若い世代や地元の方々も多く、「つながりづくり」というテーマ自体の持つ普遍性と時代的ニーズが幅広い共感を得たといえる。また、企画者と来場者がともに考え、世界を広げるという参加型企画のコンセプトも、現代的な価値観に合致したと思われる。今後はキャラバンとしてアウトリーチの方法を検討しつつ、絵本やVRなどのかたちで、企画内容を恒久的に残すことを視野に入れている。

人生で最初の社会経験の場と、最新



おはなし会(11月13日)

の学術成果を発信する研究プロジェクトのコラボレーションという前例のない試みではあったが、子どもも研究者も、「問い(なんで?)」を追求することで世界を広げたいという共通する思いを持っている。歴史文献に言及される未知の生物を解明するという子どもたちとの創造性に満ちた共同作業のなかで、企画者自身が歴史研究の面白さを実感した、素晴らしい経験だった。本企画のパートナーとしてご尽力くださった世田谷代田 仁慈保育園の先生方に心から御礼を申し上げたい。

シビルダイアログ・キャラバン 作業部会

野田仁・熊倉和歌子・
太田(塚田)絵里奈・佐藤将(AA研)・
本田直美(AA研)
村瀬智子(イスラーム信頼学事務局)

展示解説文・ワークショップ講師:
太田(塚田)絵里奈

ポスター・パネルデザイン:本田直美

大型世界地図製作:佐藤将

パネル製作:
嘉藤慎作(AA研)・村瀬智子

運営ディレクション:

菊地みぎわ・

根本京子(世田谷代田 仁慈保育園)

今年度イスラーム信頼学は、社会の共生と共創に向けた試みとして、TUFSオープンアカデミーにて、「イスラームがつなぐ世界」と題したオンライン講座を開催しました。

イスラーム信頼学は、東京外大が運営する市民向け講座TUFSオープンアカデミーにて、講座「イスラームがつなぐ世界」を設置し、全六回にわたるリレー講義を実施しました。さまざまなコミュニケーション手段を通じて世界がどんどん密につながり合い、情報が交差するようになってなお、日本の人々の「イスラーム」の受け止め方に大きな変化が見られません。たしかに日本にもいろいろな国のムスリムの人々が住むようになり、「ハラール・フード」も知られるようになりました。それでも、イメージが固定していることに加えて、今後の日本社会のなかにイスラームをどのように位置づけたらよいか、戸惑いがあるように見えます。これは将来の地球社会に向けて日本がどのような針路をとってゆくのか、定まっていないことも意味します。そこで、本講座は、イスラームをどのようにとらえたらよいか、身近なテーマから国際的な問題まで、幅広く扱い、その際にイスラームの、異なる人々を「つなぐ力」に注目しました。もちろん、そこに壁が立ちほだかることもあります。のりこえて関係をつくることの意味を考えることを目標としました。

各回の講義タイトルと講師は下記のとおりです：

第1回 12月2日(木)	イスラームがつなぐ世界——越境する信頼のかたち	講師：黒木 英充
第2回 12月9日(木)	イスラームがつなぐ装い——ヴェールの流行とその行方	講師：後藤 絵美
第3回 12月16日(木)	イスラームがつなぐ思想——死生観と生命倫理	講師：飯塚 正人
第4回 12月23日(木)	イスラームがつなぐ経済——新しいお金のしくみが世界を変える？	講師：長岡 慎介
第5回 1月6日(木)	イスラームがつなぐ平和構築——フィリピン南部での対話の可能性	講師：石井 正子
第6回 1月13日(木)	イスラームがつなぐ地域——「グローバル近所」の可能性	講師：子島 進

受講者数：各日程16名前後が受講し、受講者数は延べ88名でした。



レバノンの北部の町ビシュメツズィーンに隣り合って建つギリシア正教会とモスク(2014年、黒木英充撮影)

「公募研究」とは、本研究領域の研究をより強化・発展・拡張するために「計画研究」と連携しながら実施する研究です。イスラームを専門としない研究者や博士号を取得して間もない若手からの挑戦も期待されています。今年度は以下の三つのカテゴリーを設け、合計7件の課題が採択されました(研究期間は2022年度末までの2年間)。

公募研究のカテゴリー

1) 本研究領域の計画研究 (A01~B03) のいずれかをさらに補強する研究

- 各計画研究の研究課題が対象とする時代・地域の拡張や非イスラーム世界も含めた他時代・他地域からの比較を行う研究
- 各計画研究の研究対象を異なる視角や分析枠組みによって考察する研究
- 2つ以上の計画研究を横断する視角からの研究

2) 本研究領域の研究項目Cの人文情報学的手法を用いた研究に関連するもの

- 計画研究C01とは異なる研究対象からコネクティビティと信頼構築を人文情報学的手法によって解明する研究

3) 本研究領域のいずれの計画研究でもカバーできていない分野から提案される研究

- D01: 法やガバナンス、開発、メディア、教育、文学、芸術、ジェンダー等の観点からイスラームのコネクティビティと信頼構築に取り組む研究
- D02: グローバルな政治・経済・社会及びその動態の中のイスラームの信頼構築についての研究
- D03: 人文社会科学の実験アプローチによってイスラームのコネクティビティと信頼構築の動態を解明する研究

カテゴリー別採択課題

1. A01 「イスラーム福祉制度を通じた互助の信頼学：金融デジタル化を用いた寄進の新展開」
ハシャン・アンマール (立命館大学)
2. A02 「18～19世紀のロシアにおけるイスラーム法学の継承をめぐるムスリム知識層の形成」
磯貝真澄 (千葉大学)
3. A02 「『やさしいウルドゥー語』と多言語社会を巡る基礎的研究」
須永恵美子 (東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門)
4. B01 「前近代アラビア語史料のデジタル解析による文民エリートの人的ネクサス研究」
太田 (塚田) 絵里奈 (東京外国語大学 AA 研)
5. C01 「計量テキスト分析とネットワーク分析をもちいたイスラーム主義組織の政治動員の研究」
山尾大 (九州大学)
6. D02 「近代日本におけるイスラームに関する知的動態とムスリム理解をめぐる知識社会学的研究」
黒田賢治 (国立民族学博物館)
7. D03 「SNSを媒体としたクルアーンがもたらすイスラームのコネクティビティの変容」
ニツ山達朗 (香川大学)



各課題の概要は、イスラーム信頼学ウェブサイトからご覧いただけます。
(<https://connectivity.aa-ken.jp/koubo/>)

信頼学の キーワードを考える

(「オンライン座談会：「イスラムの都市性」から「イスラーム信頼学」に向けて」より)

2021年10月9日、本プログラムの評価委員である加藤博氏（一橋大学名誉教授）と三浦徹氏（お茶の水女子大学名誉教授）を迎え、黒木英充研究領域代表を交えて「「イスラムの都市性」から「イスラーム信頼学」に向けて」と題したオンライン上での座談会を開催した。三名は、「イスラムの都市性」（重点領域研究、1988-90年度）、「イスラーム地域研究」（学術創成研究、1997-2001年度）の研究メンバーであり、その経験や成果や問題点が論じられたが、ここでは、「イスラーム信頼学」の背景やそのキーワードとなるコネクティビティやネットワークにしばって座談の内容を紹介する。

「イスラーム信頼学」開始の経緯

黒木：今回、自分が「コネクティビティと信頼構築」のテーマの原型をいつから考え始めたか、と振り返ってみました。おそらく「信頼」に関して共同研究が可能ではないか、と研究会後の酒席でつぶやいたのが2004～2005年頃かと思います。「信頼」「信用」について研究上の関心を持ったのはそれよりも早く、シリアでの長期滞在を終えた1990年代からエッセイを書いていました。本プロジェクトのブログにダマスクスの絨毯商人のことを書きましたが、アレppoのこんな話もあります。スーフィーのシャイフのお宅に電話がなかったので事前連絡なしで訪ねたが不在だった。するとその妻が、夫の仕事場への道案内役として、2歳半の幼子を私に預けたのです。奥さんは、いわゆる女性隔離社会の習慣で、ドア越しに言葉を交わすだけで私の顔すら見ていませんでした。

2001年の9/11事件があって、先日も20周年でいろいろな報道がありましたが、イスラームをめぐって「不信」が地球規模であふれかえるような世界になってしまいました。特に近年は、活字印刷物からネット上へと情報操作を容易かつ大規模に行うことが可能になってきました。

一方で、イスラームや中東に関して、日本人が持つ一般的なイメージは1980年代頃からほとんど変わっていない。誤った捉え方がむしろ強化されている側面もあります。今後の世界を見通すうえで、研究者が社会に対して負う責任に鑑みれば、何かせねばという思いがありました。日本のイス

ラーム研究や中東研究のレベル自体は確実に向上してきたわけで、その成果を反映して、社会に向けて収斂して提示するような大型研究をするべきだと考えたのです。

イスラーム信頼学の射程

三浦：黒木さんがおっしゃった、社会的なニーズというのはとても重要なことだと思います。(中略)その上で、信頼学やコネクティビティが、一つは研究上、もう一つは社会的なイスラームやイスラーム地域の理解にどうつながるかということでお伺いしたい。黒木さんが、信頼というのは実は「賭け」の面があるということ、このプログラムの皮切りのシンポジウムでおっしゃったときは、すごくいいなと思ったのです。だけど、それは大きな賭けもあれば、日常的な賭けもあるし、賭けと意識しない行為もあるので、どういう場面やレベルをおっしゃっているのかということ、それと、イスラームであれ、中東でもアラブでもいいのですが、そこになにか特徴的なことがあるのだろうかと思いました。

この図は、座談の準備段階で交わされた四つのキーワード（ネットワーク、ソシアビリテ、コネクティビティ、信頼）について三つの軸で整理を試みたものです。第一の軸として個を起点にして、個を重視するタイプと、集合や社会を重視する立場とがあるのではないかと、第二に、実態を問題にする場合と、モデル、形相の方を問題にする場合があるのではないかと、そして三つ目の軸として、信頼を成立させるものとして、心理を含めて文化や

心の問題というメタフィジカルなファクターと、もう一つ、加藤さんが重視する物質的生活環境というファクターがあります。この図にとらわれず黒木さんが考えるところをおっしゃっていただければと思います。

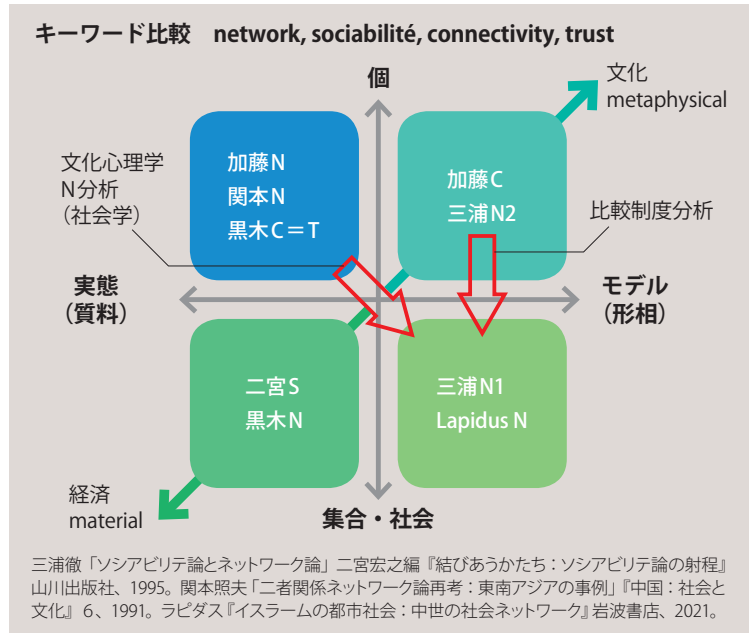
黒木：本プロジェクトは比較研究も含まれますが、それが中心ではないのです。いろいろな時代・地域から知恵を見つけ出してそれを持ち寄り、という発想です。比較によりイスラーム的なものを峻別して結晶化させるのではありません。ベクトルは逆で、「これはイスラームに限ることではないですね」「そのとおり、ここにも同じようなものがありますね」という形で、いわばイスラームを梃子にして発掘した知恵を、学的に位置づけ、吟味したうえで、社会に向けて提示したいのです。それではイスラーム研究にならない、というのではなく、そこにこそ意味があると思うのです。

コネクティビティについては、信頼をつくる場における何らかの関係、それがどのようにつくられ、壊され、修復されるか、という問題です。なのでコネクティビティは「関係づくり」と言い換えられるでしょう。人はただ漫然と関係をつくろうとするのではなく、大なり小なり何かを賭けている。そこでリスクや果実は何なのかを明らかにしてこそ関係づくりの意味がわかりますよね。この図でいうと、そういう関係づくりの企ては基本的にまず個のレベルから出発し、それが積み重なって集合社会の方に行くわけですが、それでも分析のどこかの段階で個のレベルに下がっていくでしょう。

三浦：黒木さんのイスラームの位置づけは、「イスラームの都市性」の成果物である『イスラーム都市研究』（1994）や「イスラーム地域研究」の『比較史のアジア』（2004）とも通じていて共感します。他方、私は信頼という賭けが個々にあって、それが全体としてコネクティビティ、集合になるということかと思っていたのです。今の話では、個対個の間にコネクティビティがあって、それが信頼という一つのシステム、集合的なものになるという見方ですか。

黒木：個と集団の両方ともです。関係づくりをするときには必ずそこに何らかの信頼をつくることになる。その集積により、信頼が大きな意味で制度化していく局面に移行していくのでしょう。

三浦：そうすると、コネクティビティも信頼も、集団、集合のレベルになったときは、たとえば今まで使われていた言葉でいうとコミュニティで



四つのキーワードと四つの軸（三浦徹作成）

しょうか。

黒木：それがなかなか難しい。コミュニティに対するいろいろな批判的な見方を、恥ずかしながら私はきちんとフォローしていませんでした。最近になって伊豫谷登士翁さんら3人による『コミュニティを再考する』（平凡社、2013年）を読みました。ただ、それを踏まえたうえで、やはり何らかのコミュニティ的なものをつくろうとする動きを扱う話にはなっていくと思います。

コネクティビティ、ネットワーク、縁

加藤：これまでのお二人の討論に関係するであろう、私の考えを述べてみます。私はネットワークという言葉の折につけ使ってきました。それが、社会分析における方法論的個人主義を想起させるからです。ここで、方法論的個人主義とは単純に、個人から出発して、彼/彼女が取り結ぶ社会関係の広がりとして社会を分析する研究姿勢としておきましょう。そして、ネットワークを、知覚あるいは認識できるかどうかはともかく、徹頭徹尾、個人が取り結ぶ現実の社会関係であると考えてきました。

しかし、私はネットワークという言葉の慣用的に使ってはきましたが、当初からネットワークという言葉から受けるニュアンスを嫌い、可能ならば、ネットワークという言葉避け、別の言葉に置き換えたいと思っていました。ネットワークという言葉に、量や質の違いを伴わない点と線の「平板な」結びつきを感じていたからです。言葉を換えれば、ネットワークという言葉を使うことによっ

て、個人が取り結ぶ社会関係の複雑性、多様性、不確実性、つまりは歴史性が遠ざけられてしまうと思ったのです。

つまり、私はどのようなネットワークがあるか、ネットワークによってどのような社会が形成されるか、ということに関心をもっていたのはもちろんですが、同時に、というよりは、それにもまして、そもそもなぜネットワークは存在するのか、個人はなぜ、そしてどういう契機で社会関係を結ぶのか、を説明する概念を求めていたのです。その過程で、20年前に、先の三浦さんの図で言及されている関本さんの二者関係の概念を介して、コネクティビティという単語に出会い、その後は、ネットワークに代わって、コネクティビティを多用してきました。コネクティビティが私にとって意味するところは、抽象的な「関係性そのもの」です。

突然ですが、こうして意見交換をしている今、コネクティビティよりも、私の思いを伝えることができるかもしれない言葉が頭に浮かびました。それは「縁」です。「縁」はコネクティビティでは感知されない不確実性を内包した言葉だからです。縁は分析できません。「縁」を「出会い」という事件として捉えるならば、分析できると思います。しかし、「出会い」をもたらしたのは「縁」で、「縁」自体を分析の対象にはできないでしょう。せいぜい、確率論的にできるかもしれませんが、その場合には、その「出会い」の確かさを判断するための知識—それは経験によって獲得される—を必要とするでしょう。

黒木: 今、加藤さんがおっしゃったように、コネクティビティや縁が分析できないというのは、なるほどと思いました。ただ、縁というと、所与のもの、受動的な感じがします。「ご縁がなかったですね」と言われると、予め決まっていたと納得してしまう。そうではなくてコネクティビティは関係をつくろうとする主体的なニュアンスを含んでいます。関係をつくろうとするときの、きっかけづくりや交渉、そしてそれが多方向に向かう時の戦略などです。だから、確かにデータとして分析するのは難しいと思います。でもネットワークが分析可能ならば、ネットワークのそれぞれのノードの結合の仕方に立ち返って、コネクティビティのあり方を想像することが可能ではないでしょうか。

加藤: その通りだと思います。ただ、この点について、私見を付け加えさせてください。実は、これまでの黒木さんと三浦さんとの間での、学問の社会性についての熱いやり取りを聞いていて、居



心地の悪さを感じていました。私は先に、分析概念としてコネクティビティという言葉を使うようになった経緯を述べましたが、私がコネクティビティという言葉に託した思いは、それによってネットワークという言葉に否応なくまわりつく具体性を払拭することでした。実は、このことは、社会関係を分析する際に、個人の主体性を消し去ることに通じます。

黒木さんは私よりも一回りも若いからピンとこないでしょうが、70年代の大学紛争の余波のなかで学生生活を送った私には、当時、知識人の間でもはやされた実存主義、とりわけサルトルの思想に大きな影響を受けました。サルトルの思想を一言で述べれば、不条理で偶然に支配される世界にあって、時々刻々、「賭け」をしながら生きていくのが人間の存在のあり方だというものです。その「賭け」を、サルトルは「アンガージュマン(投企)」と呼んだ。私もまたご多分にもれず、このアナキーな思想に染まりました。

しかし、そのうち、サルトルはマルクス主義に接近するなかで、「投企」という形でしか存在しえないのが人間だという主張から、徐々に、「投企」という形で存在しなければ人間ではないという主張に代わっていく。私の実存主義に対する熱は、急速に冷めていった。人間の過剰な主体性の主張に嫌気がさしたからです。かくて、私もまた、実存主義の後にきた、主体なき思想、つまり構造主義への共感を深めていった。

ここで私が言いたいこと、それは主体を殺して社会を分析しろということではありません。個人の主体性の発露の結果が、われわれが目にすることができる社会関係であることは間違いありません。しかし、その可視化された社会関係をネット



座談会参加者の写真

A加藤博氏、B三浦徹氏、C黒木英充研究領域代表、ほかイスラーム信頼学関係者

ワークという言葉で表現すると、「出会い」の偶然性一私に言わせれば、豊饒性が薄まり、平板な分析しかできないのではないかと危惧するのです。

黒木：加藤さんの大学紛争世代としてのお言葉ですね。確かに、そうか、実存主義と構造主義かと今、しみじみとうなずいてしまいました。

三浦：私が都市研究のときに、ラピダスという研究者の議論を使って、社会全体のモデルをネットワークという形で表現したので、三浦NやLapidus Nは右下にあるのです。それに対して加藤さんが、三浦のネットワークの使い方はおかしいとおっしゃって、ネットワークという言葉で問題にしたいのは、個を重視した個別的な関係の実態であると言うので、加藤Nは左上にあるのです。そして、コネクティビティという言葉はネットワークに代って、より一般化、普遍化された概念として使いたいとおっしゃったので、加藤Cは右上に置きました。いま提示された「縁」という言葉は私には個別的具体的な関係をさすようにみえるのですが、「縁」とコネクティビティとネットワークの異同についてもう少し説明していただけますか。

加藤：三浦さんを批判したのは、若気の至りでした。お互い、若かったですね。批判の背景にあったのは、当時、三浦さんがネットワークを分析概念としてイスラム社会の特徴を明らかにしようとして悪戦苦闘していたとき、私といえば、先に述べたように、三浦さんとはまったく逆の方向で、ネットワークに代わって社会関係を分析するための概

念を求めていたのです。三浦さんのいまの問いかけに対するとりあえずの私の答えは、次のようなものです。

なぜAとBの個人は縁(コネクティビティ)で結びついたのか。それを分析するのは恐らく不可能です。たとえば、両人が生まれたときからの許嫁であったとしても、それは父・母の縁のためであり、そして父・母の縁は祖父・祖母の縁のためであり・・・と縁には個人を超えた歴史が積み重なっているからです。「縁」は、社会関係をつくりだす、強い不確実性をともなう契機を意味します。しかし、AとBが結びつく蓋然(がいぜん)性は恐らくネットワーク分析でできると思います。そのためは、可視化されたネットワークで結びついた個々人の歴史を徹底的に調べなければなりません。この点において、イスラムのハディース学はすごい。そこでの素材は、ビッグデータのAI分析に適合的だと若い時から思っていました。私自身はITに背を向けたアナログ人間ですがね。

信頼・コネクティビティの分析に向けて

三浦：人文学は基本的に個に関心があると私はずっと考えてきました。そして社会科学といわれるのは、その名のとおり集合や社会に関心がある。その場合、個をどう設定するかというと、社会科学における個というのは普遍的な人間だったわけです。極端に言えば属性を捨象する。そういうなかで、この20年ぐらいの間に提示されている

二つのトレンドがあって、一つは比較制度分析です。(中略)もう一つはデジタル・ヒューマニティーズですが、個別的な情報を、デジタルデータとコンピュータを使って、もう何百、何千、何万のデータを扱えるわけです。そこから、統計数理の方法を使ってモデルをつくっていくというのがデータサイエンス、あるいはデジタル・ヒューマニティーズのある分野になってきているわけです。私はそれにすごく期待も持っているのですが、場合によっては関係者の属性を捨象してしまうのです。(中略)個別的な情報から、ネットワークという構造にたどりつくその道のりについては、黒木さんや加藤さんはどう考えていらっしゃるでしょうか。

加藤：なんとも重い問いかけですね。短時間で答えるのは無理ですが、今、この場で思いついた言葉をつむいでみます。まず、最初に知っていただきたいのは、物質的なものであれ観念的なものであれ、私はそのなかに、一度として「普遍性」を求めたことはないということです。言葉を換えれば、私は起きたことは事実であるが、事実をそのままの形では認識することはできないとする点で、不可知論者です。象をなでる盲人のたとえ通りです。したがって、私にとって方法論は認識論と分かちがたく結びついています。つまり、認識の枠組みと依拠する資料があらかじめ明示的に提示されていれば、テーマであれ資料であれ分析方法であれ、なんでもありの方法論的オポチュニストです。

ですから、私自身、これまでの研究の大半を、どのような視角からデータ・情報が集められたのか、そして集められたデータ・情報にはどのようなバイアスがかかっているのかを検証する、広義の資料考証に時間を割いてきました。そのなかで、私にもっとも合っていると思ったのが、方法論的個人主義の採用であり、それに適合的なマイクロなデータ・情報の収集でした。しかし、マイクロなデータ・情報をやみくもに多く集めればよいというものではないでしょう。「合成の誤謬」という用語があります。経済学の用語で、マイクロなデータは正しくとも、それがマクロな集計値として合成されると、意図せざる結果を生み出すことを意味します。私は、このマイクロ分析とマクロ分析の間で生じる矛盾に面白さを感じるのですが、それはともかく、やみくもに集めたマイクロなデータ・情報を、統計学的処理を含む資料考証なしに分析すれば、ただやってみた、という結果に終わるのではないかと思います。

そして、ただやってみた、というだけで終わら

ないためには、データ・情報に対する資料考証の段階で、分析のスピードを高めるためにも、なんらかのデータ・情報の選別と類型化は必要なのではないかと思うのです。もっとも、IT技術が発達し、AIがこの選別・類型化自体をやってくれるのかもしれませんが、しかし、それでは、研究者の「主体性」はどこに。何？おまえは先に、「主体」の消失を願ったではないか！何が何だか、自分でも言っていることが分からなくなってきた。ともかく、ここで言いたかったのは、データ・情報の選別と類型化の指針となるのが、三浦さんが目指している社会のモデル化だということです。三浦さんは「個別的な情報から、ネットワークという構造にたどりつくその道のり」と述べられましたが、私に言わせれば、それは「過程」の問題ではなく、ネットワークの東としての社会を知るために、ネットワークの個別的な分析とネットワークを分析概念として磨くことを、どう「協働」させるかの問題であると思っています。社会を「全体」として知ろうとする試みは、チルチル・ミチルが「青い鳥」を他所に探しに行くようなものですよ。

黒木：本プロジェクトは、コネクティビティ分析から出発してネットワーク理論の再検討や新たなモデル構築に至る、という路線を否定するのではなく、もちろんその成果が得られれば素晴らしいと思いますが、そこに収斂するものではないのです。領域名の副題にあるように分断状況をのりこえるための戦略知をどのようにすくい出すか、です。大風呂敷を広げていると思われるかもしれませんが、過去・現在の人々のダイナミックな関係づくりの現場にそのヒントは無限に存在するわけで、そういった素材を収穫し、調理して多くの人たちに吟味してもらうことを目指しています。そのために従来型の文字資料やフィールド調査による研究の方法や新たなデジタル・ヒューマニティーズの手法を可能な限り積極的に組み合わせたいですし、そこから個の一回性の現実を十分に踏まえたうえで比較・援用に耐えうるモデルが浮上すればいいですね。

本日は貴重なご意見を多数いただき、どうもありがとうございました。

アルジェリア女性の「手仕事」を支える 社会的ネットワークと実践知

山本沙希
立教大学

アルジェリアで零細業を営む女性は、製菓調理や手工芸を主な専門としている。「手仕事」と総称されるこれらの活動は、都市の社会的ネットワークと個人の実践知を支えにして成り立っており、その一要素として信頼がある。

アルジェリアでは仕立てや機織り、製菓調理など、女性が家内で行う零細規模の活動は、それが有償労働か否かにかかわらず「手仕事 (*khedma b-elyed; travail à la main*)」と呼ばれる。特にこれらの技術に長けた女性を指す表現として、同地には「全ての指に技法を持つ (*kull šb'a bi šanu'a*)」という諺がある。筆者は、この「手仕事」ないし「指の技法」を稼得手段とする女性及びその支援団体を調査対象として、これまで首都アルジェを中心にフィールドワークをおこなってきた。

家内の様々な有償労働は、公的統計上は無職や失業状態とみなされ、その実態が見えづらいこともあり、フェミニズム研究では「見えざる仕事 (*invisible work*)」という。そして、それは無償家事労働の空き時間を有効活用しているに過ぎないとの見方により、過小に評価されている点が問題とされてきた。以上を背景に、筆者は「全ての指に技法を持つ」現代のアルジェリア女性が、自宅内外の社会的ネットワークや個人レベルの創意工夫を通してどのように現金収入を得ているかを、仏統治時代に入植したカトリック女子宣教会や国内女性団体といった組織の利用及び個人の稼得実践に着目し、調査を行ってきた。

アルジェで手仕事業を営む女性は、法的な保障よりも情に基づく互酬的關係や取引先との個人的な関係を重視しているようだ。彼女たちは事業認可や職人としての公的資格を取得せず収益の申告もしない、いわゆる「インフォー

マル」な零細事業主である。なかには開業した小売店を工房として虚偽申告し、課税を免れる例も認められる。これらの女性事業主には、(必ずしも「女性だから」とは言わないが) 男性の仲買人や小売り業者に足元をみて安く買い叩かれたり、一般客から「手持ちの金がない」ことを理由に支払いを先延ばしにされたりするリスクがつきまとう。そういったトラブル回避のために、彼女たちは、互いに素性を知っている近隣在住の男性店主や、離婚して困窮状態にある自身に同情し、商品を買って取ってくれた小売り商人に恩義を感じて商取引を続ける。つまり、相互の信頼を前提とした商慣行を実践しているのである。

他方で、親しい間柄での取引では、その親しさがかえってあだとなり、安く売ること、いわば「気前の良さ」が期待されることがある。また、大衆地区ではそもそも羽振りの良い客を得るのは難しい。次第に、女性事業主は近隣住民や親族といった身近な人びとに依存しては、利益の最大化に結びつかないことを認識していく。披露宴用の菓子製造を専門とする、旧市街(カスバ)在住のある女性は、この理由により周辺住民の注文は受け付けず、自宅から離れた中流階層以上が暮らす地区での展示会への参加やソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)の利用を率先して行っていた。身近な社会的ネットワークは最小限の利益を得るためのセーフティネットにはなっても、収益を拡大していくには限界があ



結婚式の披露宴時に来客に振舞われる菓子類。このように様々な種類の菓子を店頭や展示会の場で陳列・宣伝しておいて、客からの大量発注を待つ(2015年、山本沙希撮影)

る。よって彼女たちは、合理的な利潤の追求と、信頼関係の重視との狭間でうまくバランスを取りながら、商行為としての手仕事を成立させている。

以上を整理すると、有償労働としての手仕事は血縁や地域的紐帯など、身近な社会関係に一方的に「埋め込まれた」経済活動とは言い難い。その商慣行には経済的合理性と信頼に基づく互酬性とが入り混じり、それゆえに臨機応変な計算や操作性、巧妙な駆け引きが求められる。身近な他者を頼りにしているだけでは、いずれ大きな損失に繋がってしまうかもしれない。このような問いをもって、アルジェリア女性の手仕事を支える社会的ネットワークと実践知のメカニズムを、今後は多面的な意味を含む「イスラーム的」信頼とのかかわりから考察していきたい。

日下部尚徳
立教大学

ロヒンギャ問題の最前線

2021年12月現在、バングラデシュ南東部コックスバザールの難民キャンプではミャンマーのイスラム系少数民族ロヒンギャが90万人生活している。難民発生当初、「ムスリム同胞」としてロヒンギャ難民の受け入れに前向きな姿勢をみせていたホストコミュニティだが、流入から4年以上がたっても状況が一向に改善しないことでロヒンギャとの軋轢が深まりつつある。

ロヒンギャはなぜ差別されるのか

ロヒンギャは、ミャンマーのラカイン州に暮らすムスリムの少数民族だが、ミャンマー政府はロヒンギャという民族の存在を認めていない。彼らはバングラデシュからの不法移民だというのがミャンマー政府の主張であり、ビルマ人を中心に国民の大多数もそれを支持してきた。1982年に施行された国籍法では、1823年以前から住んでいると認定された民族以外は、個別審査のうえ「準国民」「帰化国民」「外国人」に分類される。ロヒンギャはベンガル系の不法移民であるとして、法的に「外国人」として扱われている。多くのロヒンギャが英国植民地期などに移住した祖先を持ち、何世代も前からミャンマーで暮らしているという事実がありながらも、ミャンマー人の多くは、ロヒンギャはミャンマー国民ではなく不法移民であるという政府の公式見解を自明のものとして受け取ってきた。

また、ロヒンギャがミャンマーでは5%に満たない少数派のムスリムであることや、多数派民族と異なり色黒で彫りの深いベンガル系の顔立ちであること、バングラデシュの国語

90万人が暮らすバングラデシュのロヒンギャ難民キャンプ
(2018年、日下部尚徳撮影)



であるベンガル語の一方言に近い独自の言葉を話し、ミャンマーの公用語であるビルマ語がうまく話せない人が多いことなどが影響し、ロヒンギャに対する差別が助長されている。ミャンマーにおいてロヒンギャは蔑称の意味あいもある「ベンガリ」と呼ばれ、一般市民からの差別、国軍による迫害の対象となってきた。

ミャンマー国軍による弾圧

現在に至る大規模な難民発生の発端は、ミャンマー国軍がバングラデシュと国境を接するラカイン州北部のロヒンギャ集落で大規模な軍事作戦を実行したことにある。ロヒンギャ集落への攻撃は、2017年8月25日に「アラカン・ロヒンギャ救世軍(ARSA)」を名乗るロヒンギャの武装勢力がミャンマー警察・軍関連施設をナタや竹槍で襲撃したことに対する掃討作戦として行なわれた。しかし、一般市民の暮らす集落の焼き討ちや無差別殺人、女性に対する集団レイプなど「人道に対する罪」にあたる残虐行為が組織的に行われたことから、国際社会は非難を強めた。国境なき医師団の調査によると、この作戦で1カ月間に6700人の一般市民が殺害され、70万人のロヒンギャがバングラデシュ側に避難した。

難民発生直後からミャンマー・バングラデシュ両政府は難民の帰還にむけた交渉を進めたが、掃討作戦の当事者である国軍の責任追及がなされず帰還後の安全が保証されないことや、移動の自由が確約されないことなどから、難民が帰還に応じず、すべての帰還事業が失敗に終わった。また、ロヒンギャ集落を焼き討ちにしたミャンマー国軍が2021年2月にクーデターを起こし、民主化勢力への攻勢を強めたことから、難民キャンプの長期化はもはや避けられないものとなった。

ムスリム同胞への支援

難民発生当初、支援を求めて難民が増加することを恐れたバングラデシュ政府は、NGOや国際機関によるロヒンギャへの人道支援を厳しく制限した。そのため、着の身着のまま



市場で転売される援助物資
(2018年、日下部尚徳撮影)



支援を求めて道端に座り込むロヒンギャの家族 (2017年、ジユマネット提供)

避難したロヒンギャの人びとは、何の援助も得ることができず、ビニールシートでテントを作り雨風をしのいだ。

こうした惨状を見かねて最初に救いの手を差し伸べたのは、コックスバザールに暮らす一般のバングラデシュ人であった。彼らは難民を受け入れるホストコミュニティとして、ムスリム同胞であるロヒンギャに対しボランティアで衣食住を提供した。また、モスクやイスラーム団体のネットワークを通じて国内外から支援のための資金が集まり、ロヒンギャ救済への機運が高まった。その後、国際社会や国内のイスラーム団体からの批判を受け、政府は支援の拡大へ舵をとることになるが、それまで難民の命を支えたのはコックスバザールの一般市民であった。

ホストコミュニティとの軋轢

しかしながら、難民との生活が長期化する中で、当初は受け入れに前向きだった現地の人びとと、難民との間での軋轢が深まることとなる。ホストコミュニティと難民双方での殺傷事件やキャンプ内での不審火が続発し、一部地域では、援助団体の車が難民キャンプに入ることをホストコミュニティの住民が妨害するといった事態も起きている。

難民の流入は現地の人びとのこれまでの生活を一変させてしまい、社会・経済が大混乱に陥る。例えば、援助物資として配給される米や豆、調理用油をロヒンギャが大量に転売するため、これらの商品の価格が下落する。一方、十分な配給がない新鮮な野菜や肉、魚、薪、小麦粉などは、ホストコミュニティを通じて購入することになるため、これらの市場価格は上昇する。

また、原則禁止されてはいるものの、現金収入を得たいロヒンギャが低賃金で日雇い労働に就くことで、労働賃金の低下もみられる。UNDPの調査によれば、キャンプ周辺では

20%もの低下がみられた (UNDP 2018)。

こうした価格変動をうまく捉えた一部の商人は利益を上げることに成功し、土地持ちの富裕農家は賃金の低下により日雇い労働者を雇いやすくなった。しかしながら、稲作を主な生業とする大多数の農民、とりわけ土地なし貧困層にとっては負の影響のほうが大きく、次第に人びとはロヒンギャのせいで生活が厳しくなったと感じるようになった。膨大な数の援助関係者が地域に入ってくることで、家の賃料やリキシャ(人力車)、三輪タクシーの乗車賃など、日常生活に関わるものの価格が目に見えて上昇したことも、ロヒンギャに対する怒りへとつながった。

加えて、ロヒンギャ流入後、誘拐や強盗といった犯罪が増えたと感じる人が増加している。難民に治安上の懸念を結びつけるのは世界中で見られるが、バングラデシュにおいても、難民を狙うブローカーがホストコミュニティの住民も標的とすることで、人身売買や児童婚の脅威が以前よりも高まったとの認識が広がっている。

このように、当初はムスリム同胞への支援に積極的だったバングラデシュの人びとも、事態が長期化する中で、次第に難民を敵視し、援助団体や政府への怒りを募らせるようになっていった。同じベンガル語を話すムスリムといえども、ロヒンギャはミャンマーに帰るべき避難民であるという認識は強く、バングラデシュへの定住を支持する者はほとんどいない。自らの生活も厳しい中で、他者に手を差し伸べ続けることの困難さはムスリムであっても同様である。

<参考文献>

UNDP (2018), *Impacts of the Rohingya Refugee Influx on Host Communities*, UNDP.
日下部尚徳・石川和雅 (編) 『ロヒンギャ問題とは何か―難民になれない難民』、明石書店、2019年。
根本敬 『物語 ビルマの歴史―王朝時代から現代まで』、中央公論新社 (中公新書)、2014年。

熊倉和歌子

東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所

人文情報学からつながる・ひろがる

現在、私はC01班「デジタルヒューマニティーズ的手法によるコネクティビティ分析」の研究代表者を務めている。こういふと、さも情報学に通じているように聞こえるかもしれないが、それはまったくの誤解である。そんな人間が、なぜ今、「デジタルなんとか」などと言いだしたのか？何が面白いのか？何の意味があるのか？そこがこのエッセーの主題である。

人文情報学との出会い

思い返してみると、私が人文情報学と出会うこととなる種はすでにさまざまところで蒔かれていた。2015年、石田友梨さん(岡山大学・C01研究分担者)がネットワーク分析のためのソフトウェアであるGephiを用いて、スーフィーの師弟関係を可視化分析した報告の際、私は会場の最前列で前のめりになって聞き、終了後に石田さんのもとに駆けつけ、いつか一緒に研究してみたいという話をした。2017年には、バイルート・アメリカン大学で開催された国際マムルーク朝学会の会期中、バイルートの居酒屋で、これからは人文情報学に取り組まないで国際的な競争に勝てなくなると熱く語る伊藤隆郎さん(神戸大学・C01研究分担者)と意気投合した。思えば、現在、C01班のメンバーとなっているのは、私とのあいだにこのような接触があったか、もしくはたまたま近くにいる巻き添えをくった人たちである。

そしてその間にも、マキシム・ロマノフさん(ハンブルク大学・C01研究協力者)がコンピュータ解析を用いたテキスト分析やネットワーク分析に関する研究を次々と発表し、時代の寵児となっていた。国内においては、2019年に刊行された『歴史情報学の教科書』の影響は大きかった。「歴史情報学」という言葉に内包されるさまざまな知識についてわかりやす

い言葉でまとめられ、その内容の充実ぶりはさることながら、全文PDFで無料公開もしているという新しい販促のあり方に度肝を抜かれた。この書の共著者である永崎研宣さん(人文情報学研究所・C01研究分担者)は、まさに現在の日本の人文情報学を牽引する第一人者である。

そもそも、私が人文情報学に関心を持ったのは、それが自分の専攻する歴史学/人文学を追究するための手法を開拓する学問だからである。そういふと、「それって単に手法でしょ？重要なのはどのように研究するかよりも、何を研究するかでしょう？」などと言われることもある。しかし、人文情報学は、単なる手法の開拓に留まるものではなく、もっと大きな学術的な変革をもたらすものなのである。

データ駆動型人文学がもたらすパラダイムシフト

従来の人文学においては、研究者がデータを集めながら得た感覚をもとにして仮説を立て、データを補いながら検証していくという方法が採られてきた。しかし、人文情報学が目指すのは、大規模データを解析することにより傾向を見だし、発見に導いていく「データ駆動型」のアプローチである。現在、歴史学においても「史料のデジタル化」が注目され、需要が高まっているが、デジタル化の最大の目的は、データ

近年次々と出版されている人文情報学関連の書籍。どれも初学者でも読みやすく、入門書としてもおすすめできる。



Voyant Toolsに読み込ませて「ジスル(土手)」という語を検索した結果



人名録における女性を対象とした師弟関係を示したネットワーク図。Palladio (<http://hdlab.stanford.edu/palladio/>) は無料で簡単に使えるブラウザベースのアプリケーション。

駆動型の研究を可能とすることなのである。こうした考え方が根底にあるからこそ、デジタル化したものをオープンにする動きや、その際には(解析が楽になるように)共通の規格やガイドラインに準拠するようにしようという動きがあるのである。

イスラーム史においてもこのような動きは着実に進んでいる。アーガー・ハーン大学が進める巨大プロジェクト「キターブ・プロジェクト」は、イスラーム初期から現在に至るアラビア語文献のデジタルコーパスOpenITIをGithub上で公開している (<https://github.com/OpenITI>)。紙媒体では複数巻に分冊されていたテキスト情報が、デジタルファイルでは一つにまとめられる。例えば、これをVoyant Tools (<https://voyant-tools.org/>) に読み込ませると、共起ネットワークや特定の用語が出現する相対度数が可視化される。これまで、多くの時間をかけてきた作業が一瞬で完了してしまうのである。

扱う情報量の飛躍的な増加と情報処理の高速化ということに加えて、もう一つデジタルがもたらす変化が情報の可視化である。量的分析の可視化はモデルの発見にもつながる。例えば、ネットワーク分析では、ネットワーク上でより多くの人とのつながりを持つ人は大きなノードで表される。このようにしてつながりの特徴が可視化される。

マニュアルも楽しむ

とはいえ、デジタルなものが必ずしも万能というわけではない。例えば、デジタル化されたテキストの質については、使用前に確認しなくてはならない。私たちの班では、OpenITIに上がっている人名録史料のファイルを用いるにあたり、ロマノフ氏から使用前にテキストの確認が必要であるとの助言を得た。そこで、太田(塚田) 絵里奈さん(C01研究協力者)と伊藤さんが学部生や院生の力を得て、刊本とデジタルテキストの照合を行ったところ、本文に大小複数の脱落箇所が見つかった。また、テキスト分析も、すべてが魔法のように可能となるわけではない。例えば、XMLベースのタグ付けの指針であるText Encoding Initiative (TEI) に準拠してテキストにタグを付けていく場合でも、タグ付け作業を完全に自動化することはできない。なぜならば、タグを付けるという行為自体がテキストの解釈と深く関わるためである。したがって、実際は、かなりマニュアルな作業が求められることもある。しかし、意外に思われるかもしれないが、こう

した作業は必ずしも退屈なものというわけではない。むしろ、史料の精読につながり、過去に読んだ史料の中からも新たな気づきを得ることができるという嬉しい効果もある。

私は、先ほど、人文情報学は、大きな学術的な変革をもたらすと言った。学術的な変革とはつまるところ、研究の効率化である。効率化が「変革」とまで言えるのか?と疑問に思われるかもしれない。しかしどうだろう?人文学において、これ以上の変革はないのではないだろうか?つい数年前までは、研究人生において収集できる情報量には限りがあると考えていたが、今や、状況は大きく変わっている。もう一点、付け加えるならば、人文情報学は異なる分野の人との学術交流を促進する。なぜならば、何を隠そう手法の開拓が中心的な議論に据えられているためである。異なる分野間でテーマを共有するためには工夫や仕掛けが必要となるが、手法ならば簡単に共有可能なのだ。その結果、人文情報学研究の現場ではさまざまな専門の間で異種格闘技戦が展開され、チーム単位では手法の開拓が進められ、個人研究単位では新たな手法を応用したテーマの追究が同時並行で行われている。手法の話で何が悪いのか。いいことづくしじゃないか!

2021年度、イスラーム信託学は、新たに8名の若手研究者をむかえ、プロジェクトを推進していく体制を整えました。



太田(塚田) 絵里奈

総括班&A03

東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所・特任助教

前近代アラブ地域の都市社会史に関心があります。これまで15世紀のカイロ、ダマスカスを中心に、官僚や学者を輩出した文民エリートの家系に着目し、彼らが個人、家系、そして総体としていかなる生存戦略を描いていたかを勉強してきました。「信託学」においては、アラビア語史料をデジタル化し、対象時代を拡大して、彼らの関係を量的に解析・可視化する方法論を検討したいと考えています。同時に、研究成果の多角的なアウトリーチ活動を通じ、これからの学術の在り方を模索したいと思います。



嘉藤慎作

A02班

東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所・研究機関研究員

16~18世紀、いわゆる近世におけるインドの港市社会やインド洋交易の法・制度に関心を持って研究を進めています。この時期の港市はイスラームをはじめとしてそれぞれ異なる多様な信仰・信条を持つ人々が行き交う空間であり、内陸の社会から見た時には外の世界と接触する「境域」でした。このような多様性を特徴とする「境域」において生じてくる係争・問題を人々がどのように捉え、折り合いをつけて解決しようとしたのかを明らかにすることで本プロジェクトに貢献できればと思います。

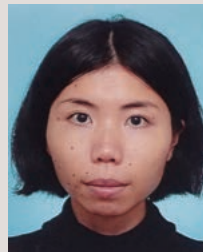


水澤純人

A01班

京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科・研究員

市民社会論に関心があります。これまで植民地期のインドにおける結社の活動について、他者との交際を円滑にする思想形成やネットワーク、自発的な「個」の形成の基盤という観点から検討してきました。現在、所属班の業務の一環としてイスラーム経済のウルドゥー語の文献目録を作成しております。国家や市場と人々の関係の概念化に格闘してきた市民社会論の蓄積を踏まえつつ、ムスリム知識人の思想的営為に学びながら「信託学」への貢献を考えてまいります。



守田まどか

B01班

東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所・研究機関研究員

オスマン帝国の都市社会史を研究しています。宗教・民族・社会的に多様な住民が共存した帝都イスタンブルにおいて、日常生活の基本単位であり、かつ行政の末端組織として機能した街区（マハッレ）に注目してきました。街区は、「水平的な人間関係」と「垂直的な権力関係」が交差する場でもあり、その歴史的展開を分析することを通して、ミクロレベルにおけるイスラーム的コネクティビティや信託構築の一事例を提示したいと考えています。



藻谷悠介

B02班

大阪大学大学院言語文化研究科・特任研究員

近代シリアの政治・行政史を研究しており、特に「近代エジプトの父」ムハンマド・アリーによる統治期（1832-1840）に焦点を当てています。エジプトから離れたシリアを新たに統治するに際して、彼が現地のムスリムおよび非ムスリムとどのような形で関係構築を試み、またその中でムスリム間のネットワークをどのように活用していたのかを検討することで、「宗教思想」や「戦略」、「垂直的権力」をキーワードとするB02班の研究活動に少しでも貢献できればと考えています。



佐藤 将

C01班

東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所・研究機関研究員

私の専門はGIS（地理情報システム）です。統計データを地図による見える化を行っており、特に子育て支援に絡んだ、①出生力向上要因と、②子育てと仕事との両立可能性要因を居住地環境の視点から分析を行っています。研究成果として今年度は①に関して、学会賞を受賞することができました。日本国内以外ではイスラーム信託学に絡んだ研究として、ナイル川流域の地形変化を古地図と衛星写真を用いて比較研究しています。またODAデータを用いた国家間関係の地図化の研究も併せて行っており、「コネクティビティ」の地図による見える化の推進をしています。



山本沙希

B03班

立教大学異文化コミュニケーション学部・
ポストドクトラル・フェロー

これまでの研究では家庭と仕事、組織といった領域にまたがり日常世界を構築する現代アルジェリア女性の生存戦術の位相を、社会的ネットワークや多様な資本形態の利用実践、複合的なアイデンティティと仕事との相互作用に着目し考察してきました。本プロジェクトでは、現代マグリブにおいて、裏切りや対立感情も含みながら生成されるコネクティビティの観点から「イスラーム的」信託とコネクティビティの在り方を検討したいと思っています。



臼杵 悠

事務局

東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所・
教務補佐兼ジュニア・フェロー

中東アラブ諸国の就業や失業、所得格差などの社会経済状況、そしてマイグレーションに関心を持っています。研究対象としているヨルダンは、パレスチナやイラク、シリアからを中心に、移民あるいは難民を幾度も受け入れてきた国です。そのため研究では、周辺地域の政治・経済情勢が映された社会の構造を明らかにしようと試みてきました。本プロジェクトとの関わりを通して、自身の問題関心を新たな観点から捉えたいと思っています。

イスラーム経済のモビリティと普遍性



研究代表者

長岡慎介
京都大学

研究分担者

- 五十嵐大介** 早稲田大学
- 岩崎葉子** アジア経済研究所
- 亀谷 学** 弘前大学
- 小茄子川歩** 京都大学
- 平野美佐** 京都大学
- 町北朋洋** 京都大学
- 安田 慎** 高崎経済大学

研究員

水澤純人 京都大学



現代イスラーム経済の代表的取り組みであるイスラーム金融のATM（2018年12月、マレーシア、クアラルンプール、長岡慎介撮影）

A01班概要

本研究は、「イスラーム経済」と呼ばれるイスラームの理念にもとづく経済活動の歴史的实践および現代に再登場したその実践に着目し、そこで見られる特有の経済制度（貨幣・金融、市場、所有制度）の独自性と普遍性を比較経済史的観点から解明することをめざすものです。

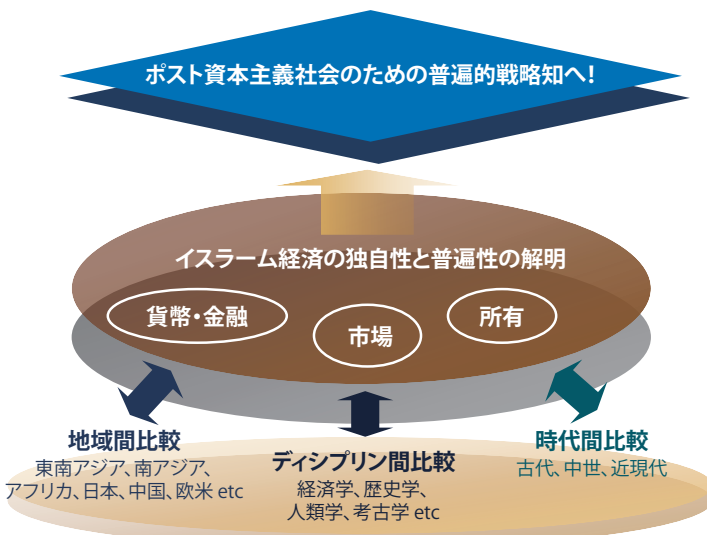
近代の夜明けとともに近代資本主義が浸透していったイスラーム世界では、20世紀半ばごろから、独自の経済システムを再興しようとする知的営為が始まりました。その取り組みは、1970年代のイスラーム金融を皮切りに、食品、日用品、ファッション、観光、福祉といった様々な産業で具現化してきています。

こうした現代イスラーム経済の実践は、単にイスラームの教義や歴史的イスラーム経済実践にもとづいているのではなく、歴史的にも同時代的にも多元的な起源を持っています。歴史的な起源の多元性については、歴史的イスラーム経済実践が、東西に広がるイスラーム世界各地の慣習や近接する文明圏（アジア、アフリカ、ヨーロッパ）の経済実践との相互交

流の中で、他地域の制度を移植したりイスラーム的に再編成したりすることで形成されてきた歴史を辿ることができます。他方、同時代的な起源の多元性については、現代イスラーム経済の実践が、アジア・アフリカ地域に根付く様々な慣習的制度や世界各地のアンチ／ポスト資本主義的運動、時には近代資本主義そのものを巧みに吸収・再構築しながら、近代資本主義のオルタナティブたる経済システムを構想してきた軌跡を辿ることができます。さらに、イスラーム経済は高い汎用性を持ち、その知恵（本研究ではイスラーム経済知と呼ぶ）や制度がある種の普遍性を持つことで、他地域や他文明圏の新しい経済実践の誕生にも寄与してきました。

このようにイスラーム経済は、イスラーム文明特有の水平的コネクティビティを存分に生かしながら、多様な価値や実践を坩堝のように飲み込み、かつ、そこで育まれた経済知や制度を惜しみなく他者に供与するダイナミズムの中で実践が行われてきています。こうした動態を、本研究ではイスラーム経済のモビリティと呼ぶことにしたいと思います。

近代資本主義の行き詰まりが本格化する今日、イスラーム経済はポスト資本主義社会を構想するための有力な参照軸の1つと考えられ始めています。それは、イスラーム経済知をイスラーム世界の経済力向上のためだけでなく、地球社会全体のよりよい未来を構築するための人類全体の知的遺産として普遍化して活用していこうというものです。本研究では、イスラーム経済の独自性と普遍性を解明する比較経済史的研究を踏まえて、イスラーム経済が普遍的戦略知としてポスト資本主義時代の地球社会システムの構築のためにどのような貢献ができるかを、他地域・他文明圏の様々な経済知と比較・協働しながら探究することをめざしたいと思います。



2021年度の活動

A01班は、今年度、主に以下の四つの活動を行いました。

- ①イスラーム信頼学国際会議の開催
- ②公開ワークショップ
「比較の中のイスラーム経済」の開催
- ③他研究プロジェクトとの共催シンポジウムの開催
- ④イスラーム経済関連文献目録の刊行準備

①イスラーム信頼学国際会議の開催 (B01班と共催、2021年12月10～12日)

本会議については、本ニューズレターの巻頭で詳細が紹介されているため、本稿では割愛します。

②公開ワークショップ 「比較の中のイスラーム経済」の開催 (C01班と共催、2021年8月31日)

このワークショップでは、A01班メンバーである小茄子川歩氏(人間文化研究機構/京都大学)を発表者、発表タイトルは「インダス文明の都市結節型広域ネットワーク「国家」/イスラーム以前の貨幣・交換様式・バッファ=都市ー」として、オンラインで開催しました。小茄子川氏の報告では、イスラーム経済のあり方を相対化する視点として、「国家」及びイスラーム以前のインダス文明における経済・社会を措定し、その考古学的検討が行われました。報告とその後の議論では、インダス文明とイスラーム経済に共通する「亜周辺」的性格、周縁化を防ぐバッファの役割などをめぐって様々な議論が行われました。

③他研究プロジェクトとの共催シンポジウムの開催

A01班とイスラーム信頼学以外の研究プロジェクトとの共催シンポジウムとして、下記の2つをいずれもオンラインで開催しました。

- (1) Joint International Islamic Economic Symposium: New Frontiers of Social Welfare and Market Systems in the Post-Capitalist Era: Islamic Economic Perspectives (2021年11月13日)
 - (2) シンポジウム「中東・イスラーム研究の課題と展望：ポストコロナ時代へむけて」(2022年1月8日)
- (1)については、A01班メンバーから安田慎氏(高崎経済大



シンガポールでリノベーションされたワクフ物件(2017年11月、シンガポール、長岡慎介撮影)



ロンドンのセントラル・モスクに設置されたザカート徴収箱(2015年11月、イギリス・ロンドン、長岡慎介撮影)

学)、Khashan Ammar氏(立命館大学、A01班関連公募研究代表者)が、(2)については、長岡慎介氏(京都大学)が報告を行いました。

④イスラーム経済関連文献目録の刊行準備

A01班では、共同研究の推進だけでなく、イスラーム経済研究のより一層の発展のために、知のインフラストラクチャーを構築することも目標としています。その一環として、イスラーム経済関連文献目録の刊行を予定しています。その準備として、今年度は各種言語で書かれたイスラーム経済関連文献の収集(西洋諸語、アジア諸語)、および目録刊行の準備(データベースの作成)を行いました。



研究代表者

野田 仁

東京外国語大学AA研

研究分担者

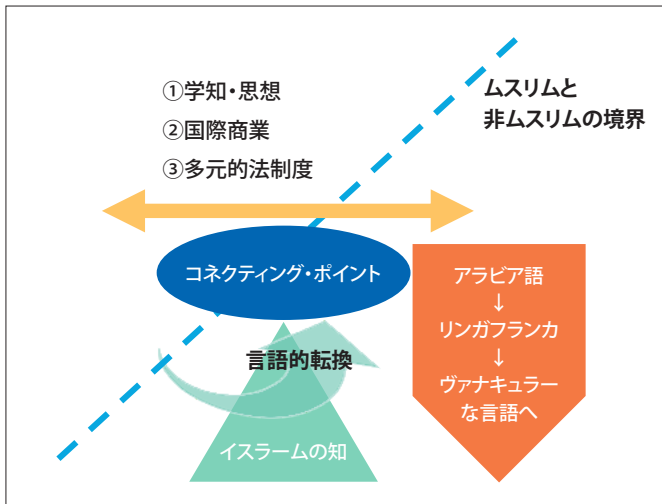
高野さやか 中央大学
 高松洋一 東京外国語大学AA研
 坪井祐司 名桜大学
 中西竜也 京都大学
 濱本真実 大阪市立大学
 矢島洋一 奈良女子大学
 和田郁子 岡山大学

研究員

嘉藤慎作 東京外国語大学AA研

A02班概要

本研究班は、イスラームの知とその変換・翻訳に注目します。とくにイスラームの東方への発展の過程において、どのような知が、研究領域全体が射程に入れているイスラーム的コネクティビティ・秩序維持・ネットワーキングを可能にしたのかを問い直します。そのために、イスラームの中心と言



馬を売るカザフ人たち (2009年2月、中国新疆ウイグル自治区伊寧市、野田撮影)

うべき中東・西アジアを離れた、辺境のイスラームを事例に検討します。境界的な領域では、イスラーム教徒(ムスリム)と外部(非ムスリム)との接触が重要な意味を持っていたからです。

イスラームの拡大過程において、イスラームの知は「変換」され得るものであり、その「知の変換」・「翻訳」の役割も重要だと考えます。ここで言う翻訳とは、元来アラビア語によってコード化されているイスラームの諸相(教義、慣行も含め)が、拡散にともなってローカルな言語に変換されることを指しています。地域の有力な言語—ペルシャ語、ムラユ(マレー語)、オスマン=トルコ語、チャガタイ=トルコ語などのリングフランカーからさらに小規模な言語への翻訳も検討に値するでしょう。このような位相を見るために、変換が先鋭的に表れる場として境界領域に焦点を当てることができます。

境界論や地政学の理論も参照しつつ境界領域における移動・越境とそれにとまなう「知の変換」に意識を向け、そこに信頼構築を重ね合わせると、以下のような学知・商業・(司)法の3局面を設定できます。

- ①イスラーム思想・学知の展開=とくにイスラームの伝播の過程における他者との接触に由来する、イスラームの再解釈、融和的言説などを分析します。
- ②国際商業=境界上での取引・交渉を、ムスリムによる仲介の視点から、貿易にかかわった通訳者の問題も交えて明らかにします。
- ③多元的法制度=エスニック集団・民族集団・国家の境界における紛争解決・紛争回避メカニズムを明らかにします。シャリーアを含む慣習法と帝国法・現代の成文法とのせめぎあいも考察の対象に含んでいます。

この三つの研究軸について、現代の状況も視野に入れながら、本研究を構成する8名の研究者が横断的にとりくむ予定です。全体として、さまざまな地域における知識・情報の言語的な変換の過程を明らかにし、それらに凝縮されたコネクティビティの知恵をあぶり出しつつ、世界のネットワーク化の過程を考察することを目指しています。

ここに掲載する写真は、中国新疆北部の大都市イリ(伊犁、現在の伊寧)近郊の馬市場です。このような市場は、カザフ人の家畜を買い求める都市の住民—ウイグル人などのムスリムから漢族まで多様な人々の交渉の場となっています。本研究では、こうした多言語空間で生じる商取引、交渉、信頼構築に注目し、このイリのような境界における結節点となる地点もコネクティング・ポイントとしてクローズアップするつもりです。

2021年度の活動

2021年度のA02班の活動とその成果について報告します。左記のように三つの研究軸を持つ本班では、それぞれの軸に対応するワークショップを開催しました（もう一件のワークショップは、年度末の開催のため詳細は次号にて報告します）。

1. 2021年7月18日ワークショップ「イスラームの知の展開とコネクティビティ」(B01班と共催、研究軸①)

報告1：矢島洋一「完全人間としてのムスリム君主」

イブン・アラビーの思想における「完全人間Insān kāmil」という神秘主義哲学上の概念が、各地の文献において君主を示す語として用いられていたことに注目して、神秘主義思想の展開と君主像の相関を考察しました。

報告2：坪井祐司「イギリス領マラヤにおけるマレー・ムスリムのコネクティビティ：マレー語定期行物の分析から」

1930～60年代にジャウィ（アラビア文字表記のマレー語）により出版されていた定期行物について、中東の改革思想の伝播の役割を果たしたほか、マレー民族形成／ナショナリズムに及ぼした影響を探る報告でした。A02のプロジェクトに即して言い換えれば、多言語の言論空間における「近代」の拡散を論じたと言えるでしょう。



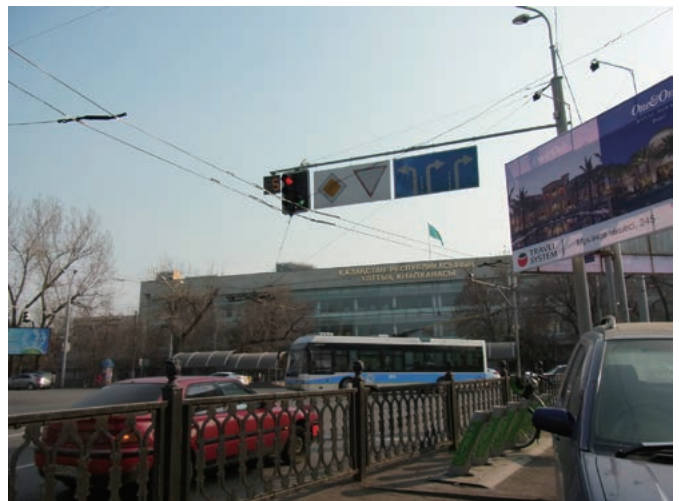
イギリス東インド会社スーラト商館長ジョージ・オクセンデン（～1669年）の墓廟（2015年、スーラト、嘉藤慎作撮影）

2. 2021年9月30日ワークショップ「近世インドの港市にみるコネクティビティ」(C01班と共催、研究軸②)

報告：嘉藤慎作「近世インドの港市にみるコネクティビティ：スーラトを事例として」

今年度よりA02班担当の研究機関研究員として着任した嘉藤氏による報告でした。ムガル帝国時代の港市スーラトに焦点を当て、多言語状況下における意思疎通や紛争の事例から、商人たちの関係性をとらえ直そうとするものでした。ペルシャ語・ポルトガル語が共用の言語として用いられていたこと、また商人たちのつながりにおいて宗教的要素と非宗教的要素の双方を見出せることも明らかになりました。

依然として海外現地調査がままならない状況を踏まえて、一つの試みとして、海外研究協力者による資料調査を実施しました。カザフスタンのジャンペイソワ氏（ユーラシア人文大学）が、同国立中央文書館・国立図書館における調査を行っています。19世紀後半のロシア帝国治下のカザフ草原は、ロシア・清朝の間の国際貿易の通過点となっていました。その際の多言語コミュニケーションが国際紛争解決や貿易の円滑化に果たす役割を狙いとして研究を進めています。これは研究軸の②③に相当します。



カザフスタン共和国国立図書館（2015年、野田仁撮影）



研究代表者

黒木英充

東京外国語大学AA研／
北海道大学スラブ・ユーラシア研
(併任)

研究分担者

池田昭光 明治学院大学

岡井宏文 共愛学園前橋国際大学

長 有紀枝 立教大学

昔農英明 明治大学

中野祥子 山口大学

子島 進 東洋大学

村上忠良 大阪大学

特任助教

太田(塚田) 絵里奈

東京外国語大学AA研



パリの大モスク (2014年、黒木英充撮影)

A03班概要

今日の世界の移民・難民問題におけるムスリムのプレゼンスは、圧倒的です。国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) によれば、2019年末の世界の難民はおよそ2600万人で、660万人のシリア難民をはじめ、ベネズエラ、アフガニスタン、南スーダン、ミャンマーの難民だけで全体の3分の2を占めています。さらに別枠でパレスチナ難民が550万人います。大半がムスリム難民であるか、ムスリムが絡んだ形の難民なのです。

移民と難民は異なる概念でありつつ、その法的な位置づけは国によってさまざまで、両者の境界も曖昧です。移民の正確な世界的統計は存在しませんが、ここでもムスリムの割合が無視できないのは疑いありません。

一方、イスラームの歴史は、最初から人の移動が刻印されています。イスラーム暦元年(西暦622年)は、メッカで迫害された預言者ムハンマドがメディナに移った「ヒジュラ」(聖遷)の年ですが、アラビア語の「移民」を意味する「ムハージル」もヒジュラと同じ語源から出ています。巡礼、遊牧、長距離商業、学問遍歴など、ムスリムは移動が当たり前の社会・文化の中で生きてきました。

では、今日の移民・難民の問題はこうした過去の高い移動

性の延長線上にどのように位置づけられるのでしょうか。

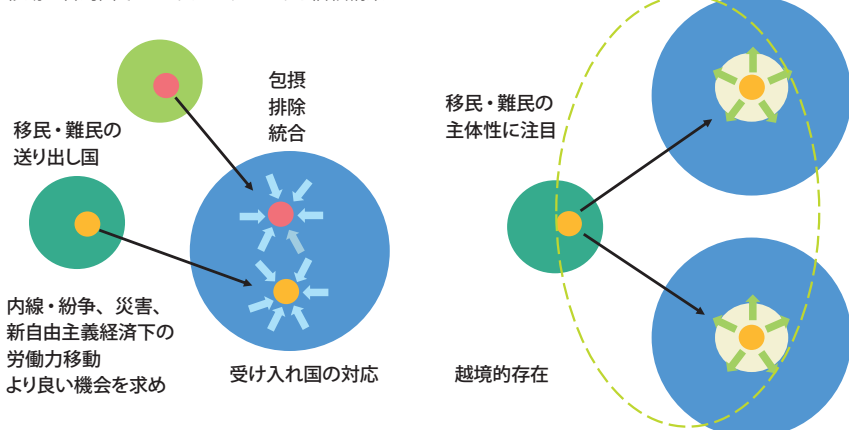
16億人とも言われるムスリムは、移民・難民として今や世界のすべての地域に拡散し、生活の足場を築き、その人口を増やしています。これまで移民・難民に関する研究は、それを受け入れる側がいかにして社会の中に排除することなく包摂・統合するか、が主要なテーマとなってきました。世界的に排外主義の高まりがみられる今日、こうした研究はますます重要です。人口減少が急速に進むなか、事実上の移民を「外国人労働者」としたまま問題にきちんと向き合っていない日本においてはなおさらです。

今後はさらに、ムスリムの移民・難民が主体的に周囲の人々と関係をつくりだし、文化的・社会的な差異や壁を乗り越え、時には遠く空間的な距離を越えてつながりを獲得する局面も重要になります。そこでイスラーム文明における関係づくりの歴史的な経験がどのように作用しているのか、そして現在、どのような挑戦が新たになされているのか、が問題です。つまり、移民・難民がいかにして信頼を構築しようとしているのか、それに受け入れ社会の側がどのように応えよう

としているのか、を考える必要があります。ときには摩擦や対立を生じさせつつも、イスラームのコンネクティビティに共鳴するような、受け入れ社会の側のコンネクティビティについても明らかにする必要があります。

私たちは、こうした問題意識のもと、日本、東南アジア、中東、欧米の地域を中心に調査・研究を展開しながら、移民・難民にかかわるコンネクティビティの暗黙知を引き出し、そこで重層的かつ越境的に形成されるコミュニティがどのようなものか、明らかにしたいと考えています。

移動の各局面でのコンネクティビティと信頼構築





東京回教学校（現新宿区北新宿）のタタール人の子どもたち 1929年の絵葉書 黒木英充所蔵
 同じ画像資料が早稲田大学古典籍総合データベース「大日本回教協会旧蔵写真資料」にあり。（整理番号409）
<https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/collections.html>

2021年度の活動

2022年1月までに計画研究班の分担者全員が、自分の研究関心に基づいた報告を一通り行い、他の計画研究班、もしくは外部の研究組織からコメンテータをお迎えしました。また、外部の研究者を招聘し、他班の分担者にコメントをお願いしました。

（以下、昨年度末の研究会も一部含みます。）左記のプロジェクト方針を説明するワークショップを開催して問題意識を共有し（黒木英充）、モロッコをフィールドにした「不信」をめぐる精緻な人類学的研究を紹介して、そこから逆に「信頼」をどのように捉えるべきか、という刺激的な議論を行いました（池田昭光）。

日本国内のムスリムがどのようなコネクティビティの拡がりをつくりだし、信頼を構築しているかは、本グループの研究の柱の一つです。東京の大塚モスクを中心とした人々の「グローバル近所」づくり（子島進）、パキスタン移民の中古車ビジネスを通じた日本と本国、さらに太平洋を越えた拡張的な関係づくり（福田友子さん招聘）、四国にてモスクをつくり、東南アジアや中東と、スポーツを通じた交流を盛んにした日本人ムスリムの足跡（岡井宏文）の事例は、実に多くの示唆を与えてくれました。異文化間心理学の手法による、国内のムスリム留学生を対象とした調査から浮かび上がる問題点も議論しました（中野祥子）。タタール移民は歴史的にロシアから日本、さらにトルコやアメリカという具合に拡散を続けてお

り、それをオーラルヒストリーの手法で分析する試みも紹介されました（沼田彩誉子さん招聘）。

南アジアの独特な流動的環境のなかで、パキスタンからタイに移住・定着してきたパシュトゥン系ムスリムのネットワークとタイ社会の受入れの実態（村上忠良）、トルコ人労働者受入れの歴史を持つドイツが、近年激増したシリア難民などムスリム移民・難民にいかに向かい合ってきたか（昔農英明）といった問題は、今後日本において予想されるムスリム移民人口の増大を考えるうえでも大きな意味があります。

一方、世界各地で頻発してきた内戦は多くの難民を生み出してきました。レバノンのシリア難民が生存のためにスマートフォンを使い、周囲との間で積極的に関係をつくりだす姿についての現地報告（マルワ・アフマドさん招聘）、旧ユーゴスラビア内戦をめぐるボスニア移民・難民の主體的な関係づくりと国際社会への働きかけ（長有紀枝）、シリア内戦を逃れたトルコ・ヨルダンのシリア難民とそのNGO組織をめぐる国際的なコネクティビティ（佐藤麻理絵さん招聘）は、移民・難民が様々なレベルでの信頼構築を見据えながら、多方向に主體的な関係をつくりだす動きを示すものです。また、「難民を助ける会」とともにトルコにおけるシリア難民支援の実態を議論しました（長有紀枝・古川千晶・黒木英充）。

これらのワークショップを通じて、「イスラーム的な特徴」が果たして存在するのか、という疑問が様々な形で提出されました。この点がまさに面白いところで、今後も考えていきましょう。

イスラーム共同体の理念と国家体系



研究代表者

近藤信彰

東京外国語大学AA研

研究分担者

秋葉 淳 東京大学

太田信宏 東京外国語大学AA研

沖祐太郎 九州大学

長縄宣博 北海道大学・東京外国語大学AA研(併任)

馬場多聞 立命館大学

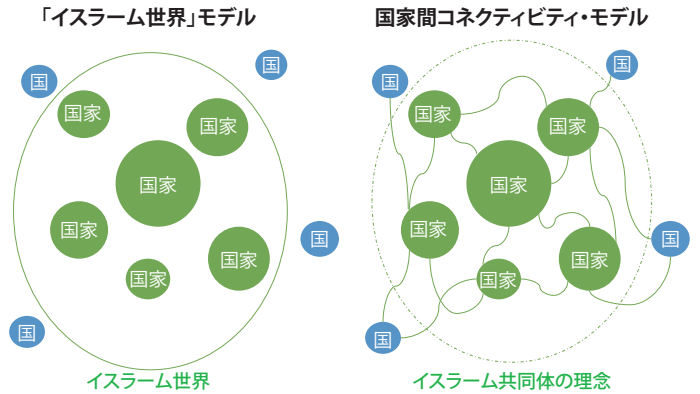
堀井 優 同志社大学

真下裕之 神戸大学

黛 秋津 東京大学

研究員

守田まどか 東京外国語大学AA研



イスラーム圏の国家体系を考える二つのモデル

B01班概要

本研究はコネクティビティと信頼の観点から、歴史的な中東、ヨーロッパ、地中海、インド洋、インド亜大陸の諸国家とその相互関係を考察するものです。コネクティビティは水平的関係であるのに対し、国家は通常垂直的なものとして捉えられます。伝統的な歴史学は、第一に、これらの地域に存在した個別の国家とそれが支配する社会を対象としてきました。かつて、エドワード・サイードが酷評したように、従来、イスラーム圏の歴史の概説は、個別王朝史の集合に過ぎませんでした。史料研究が飛躍的に進歩した近年でも、研究の中心となる史料が、叙述史料にしても文書史料にしても王朝単位でまとまっていることもあって、こうした傾向は完全に克服されてはいません。しかし、これらの諸国家を実際に支えたエリート層を見るならば、彼らがしばしば、広大な帝国の各地方やさらには国外にまでおよぶネットワークを持っていて、赴任や移住を行いながら活動を続けてきたことがわかります。本研究はまず、水平的エリートのネットワークがいかにか垂直的な国家に作用してきたかを明らかにします。

次に、個別の国家を越えて、どのような単位でこれらの地

域を考察すべきでしょうか。現在の国民国家群でなければ、かつては「イスラーム世界」というのが歴史の語りの単位でした。しかし、この単位は、イスラーム共同体の理念の反映か、近代西欧にとっての他者としてのイメージにすぎず、学術的かつ実証的な検討をした上で採用された単位ではありませんでした。しかも、「イスラーム世界」を語るといいながら、実際には広大な時空間のごく一部を恣意的にとりあげて、代表させてきたのです。これに対して、本研究は、こうしたイメージ先行の前提を退け、具体的な歴史事象から諸国家間関係を検討し、実際の諸国家間のあり方から、当時、どのような国家体系が存在したのかを問うものです。すなわち、モデルの右図に示したように、「イスラーム世界」を所与の前提とするのではなく、理念としてのイスラーム共同体の存在は考慮しつつも、個々の国家間の関係の延長として国家体系を捉えるのです。

さらに、現実の国家体系が理念上のイスラーム共同体といかなる関係にあったか、を追求します。イスラーム法は基本的に、単一のイスラーム共同体を前提に構成されているにもかかわらず、現実のイスラーム圏は、8世紀以降今日まで、常に複数の政治権力を抱えてきました。パン・イスラーム主義のような運動は存在しましたが、現実にはこの複数の政治権力が、時には対立し、時には交渉しながら、共存してきたのです。

これら諸政治権力は、いかなる原理で共存しえたのでしょうか。これら諸国家を統べる国家体系はいかなるものであったのでしょうか。コネクティビティの観点から個別の国家間関係を実証的に分析していくなかで、そのコネクティビティ連鎖の先にある、イスラーム国家体系を明らかにします。



外国使節を迎えるアッバース2世 チェヘルストーン宮殿壁画(イラン)

2021年度の活動

本年度は、まず、A01班とともに、イスラーム信頼学の第一回国際シンポジウム“Conflict and Harmony between State and Market”を12月に開催したことが最も重要な活動でした。詳細は別稿に譲りますが、オンライン開催という制約のなか、登壇者・スタッフ・参加者のご協力により、何とか成功裏に終わらせることができました。

具体的な研究については、国家間関係に関する研究を進展させました。11月に行われたワークショップ「オスマン対外関係の諸相」は、オスマン朝がヨーロッパと結んだアフドナーメ(条約)と附庸国に関するこれまでのオスマン朝対外関係の研究蓄積を示しつつ、今後の研究のための課題を明らかにするものでした。オスマン朝にまつわるヨーロッパとの外交関係は研究が厚く、また、国際法の歴史においても非常に重要な分野ですが、その成果を吸収しつつ、ヨーロッパ中心で進められてきた議論をより大きな文脈で相対化していく必要があります。10月に行われたワークショップ「近世ムスリム外交の背景」は、そのような観点から、予備的な考察ながら、古典イスラーム的世界観とムスリム諸国家の外交政策の間の相克

を論じたものでした。国内的には、自国の君主を権威づけるために、カリフにまつわる表現が多用され、他国の君主に対しては一段劣る表現が用いられましたが、対外的には他国の君主を外交の対象と認めており、関係を取り結んだのではないかという仮説が示されまし

た。

同じく10月に行われたワークショップ“Revenge of the Vernacular: Muscovy's Turkic Engagement with the Persianate World”は、モスクワの文書史料を用いることで、モスクワのテュルク語を介したムスリム諸国家との外交の姿を描き、従来とは異なる方向からペルシア語文化圏やユーラシアの近世外交を再構成できる可能性を示しました。さらにムスリム近世外交の文書史料として、トルコの文書館に次ぐものとしてモスクワの文書館の重要性が明らかとなりました。これらのワークショップは、12月の国際会議の第一パネルの準備を兼ねており、アプローチとしては比較的順調に進んだと考えています。

国家間関係から少し離れて、8月のワークショップ「中世のイエメンとインド洋における移動」は、インド洋をめぐる嗜好品や食材の流れを追い、物流とその背景にある人の移動に着目し、海域ネットワークと国家の関わりを問うものでした。内陸部の税収の方が多いため、イエメンのラスール朝(1229-1454)を必ずしも港市国家とすることはできませんが、インド洋における海域ネットワークのあり方は新たな研究への示唆に富むものでした。一方、7月に行われたワークショップ「権力との信頼の構築と破綻」では、ロシア帝国下のムスリム社会の側から、信頼の構築・破綻という問題を通じて国家を含む権力との関係を論ずるという、方法的にも斬新なもので、B01班の活動のみならず、プロジェクト全体に関わる大きな問題提起がなされました。これらの視点も取り入れつつ、B01班の研究活動をより豊かなものにしていく所存です。

残念ながら、コロナ禍により海外での資料調査や海外研究者の招聘などを行うことはできませんでしたが、オンラインでの活動など可能な手段をすべて取りながら、研究に邁進していくつもりです。



フランソワ1世宛のスレイマン1世の書状 1526年2月



1590年のアデン



研究代表者

山根 聡

大阪大学

研究分担者

青山弘之 東京外国語大学
 飯塚正人 東京外国語大学AA研
 池田一人 大阪大学
 工藤正子 立教大学
 菅原由美 大阪大学
 中溝和弥 京都大学

研究員

藻谷悠介 大阪大学



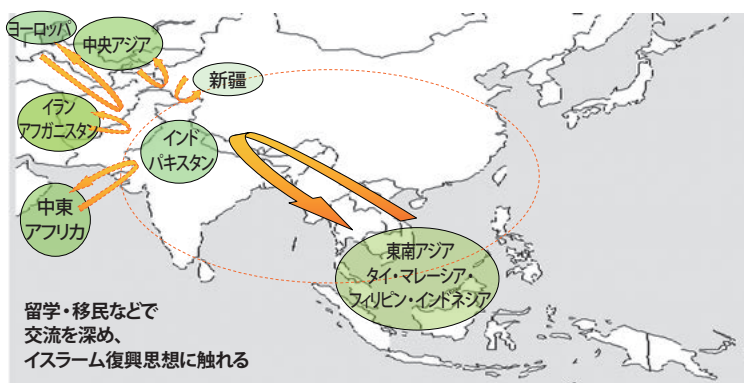
南アジアのウルドゥー語で書かれた現代イスラーム復興思想に関するマウドゥーディー (1903-79) の著作のアラビア語訳

B02班概要

「ミャンマーのロヒンギャをめぐる問題」「シリア情勢をめぐる国際社会の確執」「南アジアにおける宗教間対立」「日本やヨーロッパにおけるムスリム移住者あるいは婚姻等によるムスリム改宗者をめぐる課題」など、現代世界においてムスリムが関係している喫緊の課題について、特にその思想をめぐる影響関係や伝播の動態について、ムスリムと非ムスリム双方の視点から考察します。これにより、ムスリムの宗教思想が、紛争解決のためにいかに戦略的に交錯し、信頼構築に向かっているかを解明します。ムスリムの行動は、宗教的に正当であることが最も重要です。その行動指針はムスリムの義務である「六信五行」のうちの根幹となる神の唯一性と預言者ムハンマドを信じる点に集約されます。この基本部分を信じている者同士でのつながりが、ムスリム間の信頼構築の根幹です。

ただ、その信仰がゆるぎないものであるとしても、さまざまな新たな事象が起こっている現代世界において、一つ一つの事象に対していかなる行動をとるかは、全てのムスリムが確信を持っているとは言えません。そこで彼らは、宗教家らの見解が書籍やメディアでの発言されることなどによって宗教的正当性を確信することがあります。それは、食事のハラールを巡る問題や移住先での異教徒との婚姻などをめぐる問題、

現代ムスリムのコネクティビティの事例——非アラブ圏での交流



クルアーンをダウンロードしたスマホをズボンのポケットに入れていいの、といった日常生活をめぐる問題から、遠く離れた地域でムスリム同胞が圧迫を受けている時にどのように対処すべきか、イスラーム国家として非ムスリム諸国とどのような関係構築が求められるか、といった国際問題まで、ムスリムが直面する多岐にわたった問題の宗教的解釈が、誰によってどのようになされ、それがどのように伝えられたか、といった流れを把握することで、ムスリム同士がいかに信頼を構築してつながっていくかを明らかにします。つまり、研究の手法としては、思想そのものを研究する、というだけでなく、その思想が翻訳や留学などを、人を介していかに伝わっていったかなど思想の伝播におけるムスリムのコネクティビティを、戦略として明らかにしていきます。(図)

ムスリムが自身の活動の宗教的正当性に絶対的確信を持っていれば、行動に対する悩みは持たなくて済みます。しかし、複雑化・多様化する現代社会においてはいったいどの行動が宗教的に正しいかが解釈によって異なってくることがあります。本計画研究では、こうしたムスリムの「悩み」を解決する思想の成り立ちを明らかにすることを目標としています。これによって、世界各地のムスリムがいかに協調、連帯するかという過程が明らかになります。もちろんこの課題は、信頼構築のみならず、信頼関係を損なう思想も研究対象としなければなりません。暴力を肯定する解釈はどのように生まれ、どう広まったかを明らかにすることもまた、そうした集団の中での信頼関係を醸成する仕組みを解明することになります。研究対象地域は、世界最大のムスリム人口を抱えつつも、非ムスリムとの軋轢によるテロなどの暴力を巡る問題が発生している南アジアや東南アジア、そしてムスリム同士の対立によって内戦などを引き起こしたり、イスラーム諸国を含む国際社会の干渉が続く中東、そして新たなムスリム移民を受け入れているヨーロッパ(特にイギリス)や日本とします。

2021年度の活動

2021年度、B02班「思想と戦略が織りなす信頼構築」は、ムスリム間のコネクティビティについて、現在世界各地で発生している事象を中心に検討してきました。特に注目を集めたのは、アフガニスタンで急速に勢力を拡大したターリバーンが2021年8月15日に首都カブールを制圧し、暫定政権樹立を成し遂げたことであり、これについては数回にわたってオンライン・セミナー（ウェビナー）を開催しました。1996年9月に首都を制圧した時は「荒くれ者」の印象が強かったターリバーンでしたが、今回の首都制圧後、指導者たちは女性の権利保護や前政権からの権力移譲、あるいは戦闘回避など、比較的穏健な傾向も見せました。その背景には、この地域に対するアメリカの関心の低下や、それに代わる中国の進出など、国際関係という国家レベルでのコネクティビティが大きく変化したことが一因となっています。

また、ターリバーン自体がどのような思想的背景を持っているかについても考察し、いわゆる「ジハード主義」と呼ばれる思想が彼らの行動に及ぼす影響についても検討しました。ターリバーンの思想的背景として、従来、19世紀半ばに北インドで起こったスンナ派の「デーオバンド学派」の影響が強いと指摘されてきましたが、実際にはむしろ1980年代の隣国アフガニスタンにおける対ソ連戦争時に中東地域など外部からムジャーヒディーン（聖戦士）としてこの地域に流入した若いムスリムたちがパキスタンのデーオバンド学院を拠点とし、ここで現代的なジハードの概念を広めていった可能性が高いことが指摘されました。思想は、それ自体が勝手に動き回るのでなく、ヒトとヒトを介して伝達されるものであり、思想の伝播を研究することは、コネクティビティの解明につながるものと確信しています。

これに加えて、現代シリア情勢からもムスリムのコネクティビティについて検討いたしました。それはムスリム間のみならず、非ムスリムとのコネクティビティについても検討したものです。現在、シリアに関しては本研究プロジェクトがコネクティビティに関連する世論調査を実施しており、その結果は分析を経て近々明らかになる予定です。

このほか、直近の課題である日本のムスリム・コミュニティに関する報告では、愛媛県新居浜市における日本人ムスリムが運営した新居浜マスジドが、日本のムスリム社会では重要な位置を占めていたことなど、あまり知られていない側面に光を当ててムスリム間のコネクティビティを検討しました。

2022年2月にはインドネシアとミャンマー、3月には日本とインドのムスリムのコネクティビティに関する報告をする予定



ラーホール（アフガニスタン）のダーター様聖者廟を参詣する人々（2004年、山根聡撮影）



カンダハールのターリバーン本部（1995年、山根聡撮影）

です。これらの報告は、コネクティビティとともに、その反意語である「ディスコネクティビティ」についても検討し、ムスリムのコネクティビティの実態を、より多角的、立体的に検討することを目的としています。

また、2021年9月から特任研究員として着任された藻谷悠介さんは、コロナ禍が一時的に落ち着きを見せた2021年末にエジプトへ出張し、コネクティビティ研究に寄与する資料を収集しました。英語・仏語文献では、*Connected in Cairo* や *Spaces of Participation, Villes et urbanisation des provinces égyptiennes* など、「場」に注目して関係・信頼構築を分析した書籍を多く収集しました。またアラビア語文献では、*Yahūd Miṣr fi al-Qarn al-'Ishrīn* や *Al-Mu'allim Ibrāhīm al-Jawharī, Nisā' al-Usra al-'Alawiyya* など、非ムスリムや女性のコネクティビティを取り上げた歴史研究の出版が多く見られ、より多角的な視点からムスリム・コネクティビティを論じることに寄与すると考えられます。これらは今後の本研究に役立てていきます。

コロナ禍のために海外での現地調査が思うように進展しない分、文献収集等を行いながら、2022年度の国際シンポジウムに向けて、さらに研究を進めています。



研究代表者

石井正子

立教大学

研究分担者

小副川琢 日本大学

日下部尚徳 立教大学

熊倉潤 法政大学

佐原徹哉 明治大学

鈴木啓之 東京大学

武内進一 東京外国語大学

飛内悠子 盛岡大学

見市建 早稲田大学

研究員

山本沙希 立教大学



フィリピン国軍とISラオとの間で展開された市街戦の跡、マラウィ市（ミンダナオ島）（2018年、石井正子撮影）

2021年度の活動

B03班では、今年度はミャンマーからバングラデシュに逃れたロヒンギャ難民、中国の新疆ウイグル自治区における政府と民衆、シリア内戦とレバノン内戦の和平会議の比較、離散を繰り返すパレスチナ人が描く他者との関係、インドネシアにおける女性ジハーディスト、内戦後を生きるアルジェリア女性をテーマとしたワークショップを行いました。

武力紛争というと、社会や人びとが分断し、信頼が崩壊しているというイメージが一般的だと思います。しかし、ワークショップを重ねていくと、そう単純には捉えられない諸相が見えてきました。

例えば、レバノンの国内政治は隣国や大国の干渉を受けやすく、「浸透国家 (penetrate state)」とその特徴が捉えられています。しかし、こうした経験を繰り返すうちに、遠方の大国の干渉は利害に基づくものなので予測しやすく、相手の行為を先読みすることができるという「信頼」が生まれます。これに対して、隣国は政変が激しく予測ができない、だから頼りにすることができないという状況です。日本では「遠くの親戚より近くの他人」といいますが、「近くの友人より遠くの他人」という状況があるのではないかと興味深いコメントもありました。

ところが、その大国の予測可能性を「裏切る」行為が起りました。2021年8月15日のアメリカのアフガニスタン撤退

ベツレヘム近くの分離壁：ガザで「帰還の大行進」のなか殺害された看護師ラザーン・ナッジャーの絵が、通学する学生を見守るようだった（2019年2月4日、鈴木啓之撮影）



です。B03班では、笹川平和財団やNPO法人 ジャパン・プラットフォームと共催で8月31日に「緊急セミナー 2021アフガニスタン政変と国際社会」を開催し、田中浩一郎氏（慶応義塾大学教授）、山本忠通氏（元アフガニスタン担当国連事務総長特別代表兼UNAMA代表）、小美野剛氏（CWSジャパン（国際NGO）事務局長／ジャパン・プラットフォーム代表理事）、シャイダ・モハマド・アブダリ氏（駐日アフガニスタン大使）に近況をご報告いただきました。オンラインで開催されたこのセミナーには500人以上が参加しました。大国アメリカがとった行為の余波はどのように広がっていくのでしょうか。注視が必要です。

さて、レバノンと同じく大国、隣国の様子を見ながら国内政治の舵取りをするのがバングラデシュです。そして、この舵取りゆえにロヒンギャ難民が見放されるという状況が生まれています。具体的には、排他的なイスラーム主義の流入を恐れるインド、ミャンマーとの軍事協力、中国との貿易関係などに対する配慮が、バングラデシュ政府がロヒンギャ難民支援に積極的にならない理由として指摘されました。そのため、ロヒンギャ難民に対しては、国際機関やNGOが主に支援をすることになります。当初は同じムスリムというつながりでロヒンギャ難民の境遇に共感していた受け入れコミュニティですが、負担が大きくなるとともに不満を募らせていきます。それどころか、自分たちの負担になるロヒンギャ難民を支援していると、海外のNGOに対し敵愾心が向けられる現象が起こっています。

国際関係のレベルから紛争影響地域の事象に迫るレバノン・シリアやバングラデシュの報告に対して、パレスチナ、インドネシア、アルジェリアの例は、どちらかという個人レベルからの考察でした。最近、無名のパレスチナ人による回想録の出版が増えていますが、それらを読むと「敵」「味方」に対する猜疑と信頼が錯綜する想いが描かれていることに気付かされるそうです。むしろ、回想録の読み方には注意が必要ですが、指導者層とは異なる他者との関係性の描写に、豊かな歴史の記憶を認めることができるかもしれません。

インドネシアの例では、IS（イスラーム国）のメンバーとなった女性たちが紹介されました。取り上げられた3名の女性のISに関わる動機があまりにも異なっており、これをどう捉えたらいいか、ということが議論されました。ISへとつながる経路は、インターネットが主であり、個別化されていて、全体として把握するのが難しいことが一つの特徴のようです。研究の焦点は、なぜ女性たちはISに入ったのかではなく、どのように離脱し、社会と信頼を再構築することができるか、にあります。いずれにしても、女性がISに関わり、離脱する過



複数の女性団体関係者が共に集うイフタルの食卓。女性専用シェルターの敷地内で開催され、一時滞在中のアルジェリア人女性のほかシリアから乳児を連れて逃れてきた若い女性も参加していた。食後は参加者らが歌って踊る「お祭り」状態になった（2015年、山本沙希撮影）

程への彼女たちの内在的理解が課題になりそうです。

アルジェリアでは、1990年代～2000年代初頭の内戦後、6000～8000人が未だ行方不明であるなど、相互不信が蔓延しているとのこと。そのような状況で展開された女性たちによる雑誌の発行や、手工芸品販売などの活動が紹介されました。不信は信頼の欠如ではなく、両者とも複数ある選択肢の一つであり、対立や裏切りなど、予測不可能な不確実性に直面しながら、彼女たちがゆるやかにつながって活動している状況が紹介されました。

さて、ウイグルのことといえば、アメリカやイギリスなどに続いて、日本も、中国の人権問題を理由に2022年の北京冬季オリンピックを外交ボイコットするというニュースが報じられ注目されています。報告では、貧困がテロの温床になっているという前提（または口実）で進められる抑圧的な政策がその歴史的背景に照らし合わせて報告されました。一方、貧困対策を行うことなどによってマジョリティ側がマイノリティ側に恩恵を施しているという、マイノリティ側が同意できない前提のもとで進められる政策や差別には普遍性があり、ウイグルで起こっている問題を中国バッシングとすることなく、解明していく必要があると思います。

デジタル・ヒューマニティーズ的手法による コネクティビティ分析



研究代表者

熊倉和歌子

東京外国語大学AA研

研究分担者

新井和広 慶應義塾大学

石田友梨 岡山大学

伊藤隆郎 神戸大学

後藤 寛 横浜市立大学

篠田知暁 東京外国語大学AA研

永崎研宣 人文情報学研究所

MALLETT Alexander 早稲田大学

研究員

佐藤 将 東京外国語大学AA研

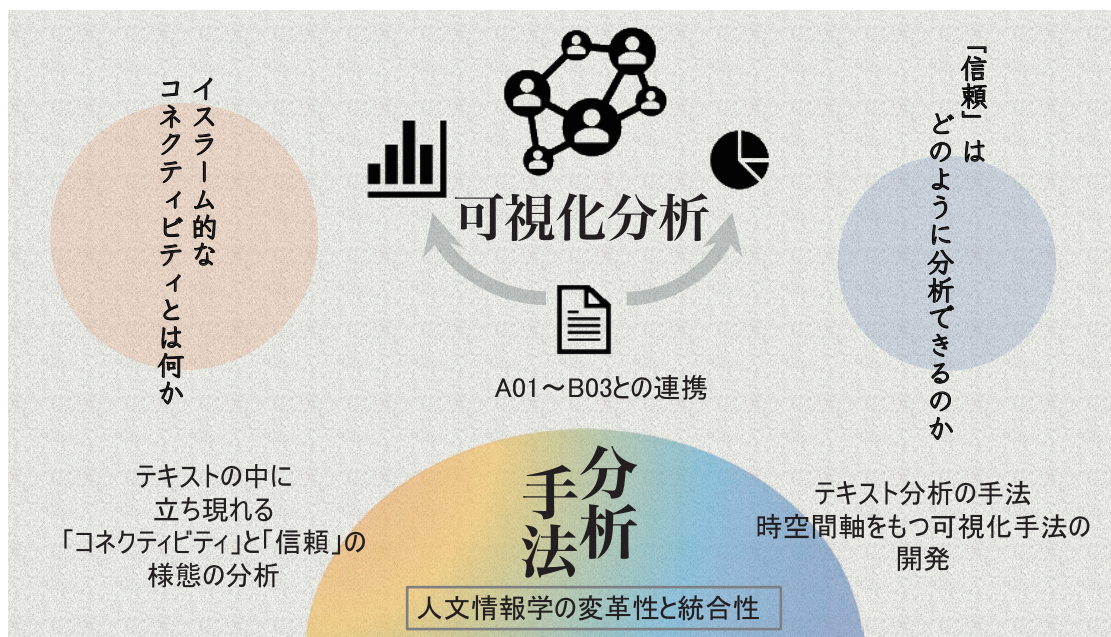
C01班概要

現在、ITとビッグデータ分析の飛躍的な進歩にともなって、知のパラダイム転換が起ころうとしています。その一つは情報のデジタル化と可視化への注目です。このような変化を背景にして、国内外において人文情報学(デジタル・ヒューマニティーズ)の分野が新たな学問領域として確立され、アルゴリズムの手法による人文知の再編が進められています。そこでは、既存の人文分野に新たな手法を提示し、大量の情報の分析を可能にするなどの方法論的パラダイムにとどまらず、デジタルという新たな地平に放り込まれた情報やそこから積み上げられる学問知が、細分化された分野の垣根をこえて交流しはじめています。本研究は、国内外において見られるこのような人文情報学の基盤を大いに活用しながら、そこにおいて研究が進められている分析手法をイスラーム文明における社会関係の可視化分析に応用し、一定のモデル化を試みようとするものです。

この研究課題において、可視化分析とともに重視するのは、

可視化のプロセスです。たとえば、コネクティビティを可視化するには、「コネクティビティ」をいかに定義するかという問題がつかまといまいます。コネクティビティの現場で生じ・コネクティビティを強化する「信頼」についても同様のことが言えるでしょう。そこで、本研究の課題は、可視化を通じた「コネクティビティ」や「信頼」に関する意味論的分析であるとも言えます。そして、その背景には、二つの方法論的な問題があります。それは、電子回路のオン・オフのように一義的にはとらえることのできない人間関係とそれらの集合である複雑な社会ネットワークをどのように可視化するかという問題、そして、その中に「信頼」をどのように見いだすかという問題です。

このような問題意識のもと、C01は、イスラーム文明において残されてきた人名録/伝記集に着目し、テキストマイニングの手法により、テキストに表される「コネクティビティ」と「信頼」を可視化分析します。このとき、イスラーム文明の地理的範囲が広範に亘ることに留意し、研究分担者がインド洋海域・南アジア地域、東アラブ地域、西アラブ地域をカバーします。さらに、異なる地域や文字を扱う研究協力者を加え、イスラーム文明が包含する地域・文字・言語の多様性についても考える機会とします。各地域のテキストを突き合わせ、その共通点と相違点を探ることにより、「コネクティビティ」や「信頼」関係の多様性・多義性ととともに、「イスラーム的」なそれらのあり方についても検討します。また、GISやテキスト分析などの方法を応用しながら、テキストから網の目のような人間関係を抽出し、時空間の中で表現する方法を提案・開発します。加えて、C01は可視化分析の手法の応用という観点から、他班の研究にも積極的に関わっていく計画です。



2021年度の活動

C01班は、昨年度に引き続き、人文情報学的手法に関して議論する機会として、ワークショップを開催してきました。ここでは、Open Islamicate Texts Initiative (OpenITI)のアラビア語文献デジタルコーパス (<https://github.com/OpenITI>)、アラビア文字用OCR、手書き文字用OCRエンジンであるTranskribusなどが扱われました。

また、日々の活動の場として、週三回Zoomミーティングを利用した「もくもく会(黙々と作業をする会)」を設定しました。私たちは、これをC01班の研究分担者や協力者に限らないオープンかつインフォーマルな会として位置づけ、人文情報学に関心がある人が気軽に参加できるようにしています。ここでの活動内容は、各自の課題を持ち寄りながら、人文情報学的手法について質問したり議論したりすることです。実際、ここで交わされる議論に着想を得て、新たな課題が発見されるなど、C01班の活動の中でも重要な部分を占めるに至っています。

この他、新たな試みとして、「デジタル・ヒューマニティーズ Summer Days 2021」を実施しました。これは四回にわたる人文情報学に関するハンズオン・セミナーです。各回一つの手法を実用可能なレベルにまで習得できる内容とし、Transkribus、地理情報システム (GIS)、Resource Description Framework (RDF)、Text Encoding Initiative (TEI)を扱いました。各回の講師とティーチング・アシスタント (TA) は下記のとおりです。

- 8月21日(土) Transkribus 講師：宮川 創(京都大学), TA：小風 綾乃(お茶の水女子大学大学院)
- 8月28日(土) 地理情報システム (GIS) 講師：佐藤 将(AA研), TA：岩崎 俊亮、大島 由莉、土田 雅代(いずれもESRIジャパン)
- 9月4日(土) Resource Description Framework (RDF) 講師：小川 潤(東京大学大学院), TA：中川 奈津子(国立国語研究所)、大井 将生、大月 希望(いずれも東京大学大学院)
- 9月11日(土) Text Encoding Initiative (TEI) 講師：永崎 研宣(人文情報学研究所), TA：小川 潤、左藤 仁宏(いずれも東京大学大学院)、王 一凡(人文情報学研究所)、村瀬 友洋(SAT大蔵経データベース研究会)、渡邊 要一郎(東京大学史料編纂所)

各回30名を定員として募集をかけたところ、すぐに応募数が定員に達し、日程を前倒しして応募を締め切るほどの盛況ぶりでした。参加者の顔ぶれは、「イスラーム信頼学」内外はもちろんのこと、分野やキャリアを問わず、さまざまな人が集まりま

した。それゆえ、多様な参加者に対して、一日で、しかもリモートで知識を伝授するのは至難の業と思われました。例えば、今回のセミナーではさまざまなアプリケーションを使いましたが、多くの人が最初につまづくのは、アプリケーションのインストールの仕方や、アプリケーションへのデータのアップロードの仕方などの操作の部分です。本セミナーでは、デバイス等の環境もそれぞれ異なる中、アプリケーションを使えるようにするまでの過程も、丁寧にサポートしながら、誰一人取り残されることなく進めることができました。それは何よりも随所での講師陣の的確な判断とTAの連携の賜であり、いずれの回も大変充実したものとなりました。事後アンケートにも、継続的にこのようなセミナーの開催を期待する声が多数寄せられました。



「デジタル・ヒューマニティーズ Summer Days 2021」内での講義資料の一部 (8月28日(土)、地理情報システム (GIS) の回)

主催者としては、このセミナーを通じて、人文情報学的手法への潜在的な需要を改めて把握しました。他方で、人文情報学の入口を見つけられずに困っている人も少なからずいることもわかりました。今後も、このような機会を設けることについては、一定の意義があると考えています。

人文情報学が人文学の一領域として新風をもたらしている理由は、目新しいツールによるところだけではありません。私は、むしろその基礎にある互助的な精神にこそ魅力があると感じています。プログラマーのあいだでは、解決できない問題をフォーラムに投稿して、回答を得るということは日常的に行われています。そうした情報学的なコミュニケーションのあり方は、人文情報学においても活用されており、分野をまたいだつながりを形成していく力となっています。C01班もまた、つながりづくりの原動力となるべく、このようなコミュニケーションの機会を今後も設けていきたいと考えています。

1. 総括班事務局より

●総括班事務局の体制

事務局運営：太田信宏、野田仁、熊倉和歌子

事務局職員：村瀬智子、畑尾朋子

事務局所在地：〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所6階(605室)

事務局連絡先：connectivity_jimukyoku@tufs.ac.jp

●広報媒体

ウェブサイト：<https://connectivity.aa-ken.jp/>

ウェブサイト内ブログへの投稿を随時受付しております。
<https://connectivity.aa-ken.jp/newsletter/newscat/blog/>
 メーリングリストを通じてワークショップなどのイベント情
 報を発信いたします。(https://docs.google.com/forms/
 d/1nng0A7IYyrbcbI5_ihcxomZm9Wif_0r9kSMd2WENCow/)



2. 2021年度に開催した研究集会など (※注記のないものはすべてオンライン開催/一般公開)

全体集会

◆2022/3/14

第2回全体集会

「信頼学のレシピ 材料編
 ～素材と方法～」

総合司会：太田信宏

1. 開会の挨拶(趣旨説明)：黒木英充
2. 第一部 材料を集める：公募研究代表者によるプレゼンテーション

司会：長岡慎介

登壇者：ハシャン・アンマール、磯貝真澄、
 須永恵美子、太田(塚田)絵里奈、山尾大、
 黒田賢治、ニツ山達朗

3. 第二部 素材を吟味する：戦略としての
 翻訳・思想：A02班、B02班代表による話
 題提供

登壇者：山根聡「ターリバーンの方針の変
 化にみる戦略的判断」

野田仁「イスラーム法と慣習法のあいだ：
 紛争解決のための翻訳」

4. 第三部 全体討論
5. 閉会の挨拶

シンポジウム

◆2021/8/20

緊急講演会

「ターリバーン政権復活をめぐる
 利益と不利益」 B02, A03 ほか

1. 山根聡「ターリバーンの25年」
2. 田中浩一郎(慶應義塾大学)「ターリバー
 ン政権復活をめぐる利益と不利益」
3. 質疑

司会：山根聡

◆2021/8/26

緊急ウェビナー

「緊迫するアフガニスタン情勢」
 B02 ほか

講師：山根聡

加藤真希(平和村ユナイテッド)

保坂修司(日本エネルギー経済研究所)

司会：酒井啓子(千葉大学)

◆2021/8/31

緊急セミナー

2021アフガニスタン政変と国際社会

1. 開催挨拶：角南篤(笹川平和財団)
2. 趣旨説明：堀場明子(笹川平和財団)

3. プレゼンテーション

スピーカー：田中浩一郎(慶應義塾大学)

山本忠通(元国連事務総長特別代表兼
UNAMA)小美野剛(CWSジャパン(国際NGO) / ジャ
パン・プラットフォーム)シャイダ・モハマド・アブダリ(駐日アフガ
ニスタン大使館)

4. 質疑応答

モデレーター：石井正子

◆2021/9/11

ウェビナー

「20年目の9.11を超えて：グローバル社会、
 イスラーム世界、ポスト・テロ時代を
 眺望する」 B02 ほか

1. 保坂修司(日本エネルギー経済研究所)
 「9.11事件から20年：アルカイダの残したもの」

2. 山根聡「9.11がもたらしたパキスタンの
 社会変容と南アジア域内関係の流動化」

3. 小杉泰(立命館大学)「穏健主流派の苦闘
 とその展望：ウスール(法源学)派を中心に」

司会・ディスカッサント：末近浩太

◆2021/12/10-12

イスラーム信頼学 国際会議

“Conflict and Harmony between State and Market” **A01**, **B01**

- Friday, 10 December

“Muslim States and Diplomacy in the Early Modern Era”

Moderator: Jun Akiba

1. Opening Address by Hidemitsu Kuroki
2. Introduction by Nobuaki Kondo
3. Michael Talbot (Greenwich University) “Signs of Sincere Friendship: Rhetoric and Practice of Trust in 17th and 18th Century Ottoman Diplomacy”
4. Nobuaki Kondo “Theory and Practice of Safavid Diplomacy”

- Saturday 11 December

“Islamic Economics”

Moderator: Shinsuke Nagaoka

1. Muhammad Hakimi bin Mohd Shafai (Universiti Kebangsaan, Malaysia) “The Malaysia’s Islamic Economy Development from the Early Stage to the Current Growth: From the Relation between State & Market Perspective”
2. Ammar Khashan “Gold Dinar, Cryptocurrency, and Waqf Crowdfunding: Reflections on Trustability of Fintech Tools from an Islamic Legal Perspective”

- Sunday, 12 December

“State and Market”

Moderator: Nobuaki Kondo

1. Jos Gommans (Leiden University) “Enter Geography: Archipelago Capitalism in the Indonesian Archipelago”
2. Mehmet Asutay “Re-imagining-and-Re-constituting Islamic Economics through Moral Economy: State, Market and Civil Society”
3. Concluding Remarks by Shinsuke Nagaoka

◆2022/2/9

『シリア難民の今』を考える
公開シンポジウム **A03** ほか

登壇者：黒木英充

景平義文 (AARトルコ駐在代表)

ハリル・オスマン (AARトルコ事務所)

モデレーター：長有紀枝

研究会・ワークショップ他

◆2021/5/25

ワークショップ

「レバノンのシリア難民女性」 **A03** ほか

マルワ・アフマド (同志社大学)「新型コロナ・

ロックダウン下のシリア難民女性の経験」

ディスカッサント：森田豊子 (鹿児島大学)

司会：黒木英充

◆2021/5/29

Workshop

“Using Transkribus to explore networks in Islamic societies: An introductory guide” **C01**, **B01**

Presentation: Alexander Mallett

Discussion

◆2021/5/30

ワークショップ

「ムスリムマイノリティと信頼構築

——ロヒンギャ人とウイグル人」

(限定公開)

B03, **A03**

コメントーター：黒木英充

1. 日下部尚徳「ロヒンギャ難民をめぐる受容と軋轢」
コメント・ディスカッション
2. 熊倉潤「新疆ウイグル自治区における政府と民衆：信頼の観点から」
コメント・ディスカッション
3. 今後の活動について打ち合わせ

◆2021/7/18

ワークショップ

「イスラームの知の展開と
コネクティビティ」 **A02**, **B01**

1. 趣旨説明：野田仁
2. 矢島洋一「完全人間としてのムスリム君主」
3. 坪井祐司「イギリス領マラヤにおけるマレー・ムスリムのコネクティビティ：マレー語定期刊行物の分析から」
4. 総合討論

◆2021/7/20

ワークショップ

「権力との信頼の構築と破綻」

B01, **A02**

長縄宣博「権力との信頼の構築と破綻：帝政末期のロシア・ムスリム社会の場合」

コメントーター：中西竜也

◆2021/7/22

オンライン研究会

「パレスチナのちいさな」となみ

——写真と文学・映画から **A03** ほか

司会：嶺崎 寛子 (成蹊大学)

語り手：岡 真理 (京都大学)「パレスチナの人々——文学と映画から」

高橋 美香 (写真家)「パレスチナのちいさな」となみ——写真から」

◆2021/7/26

ワークショップ

「紛争影響地域における他者との関係性

——シリア、レバノン、パレスチナの

事例から」 (限定公開) **B03**, **B02**

1. 小副川琢「シリア内戦及びレバノン内戦への外部アクターの関与」
コメント (飯塚正人)・ディスカッション
2. 鈴木啓之「錯綜する猜疑と信頼：パレスチナ人が描く他者との関係」
コメント (飯塚正人)・ディスカッション
3. 今後の活動について打ち合わせ

◆2021/7/31

ワークショップ

「信頼を不信から考える

——マシュー・キャリー著

『民族誌的理論としての不信』を

手がかりに **A03**, **B03**

1. 池田昭光『『民族誌的理論としての不信』の内容紹介」
 2. 池田昭光「本科研研究課題に引きつけた論文整理・問題提起」
 3. 石井正子「コメント」
 4. 全体討論
- 司会：黒木英充

◆2021/8/6

ワークショップ

「中世のイエメンと

インド洋における移動」**B01**, **A02**

馬場多聞「中世のイエメンとインド洋における移動」

コメンテーター：和田郁子

◆2021/8/11

ワークショップ

「タイにおけるパシュトゥン系住民の

ネットワーク形成」**A03**, **B03**

報告者：村上忠良

コメンテーター：日下部尚徳

司会：黒木英充

◆2021/8/21, 8/28, 9/4, 9/11

ワークショップ

「デジタル・ヒューマニティーズ

Summer Days 2021」**C01** ほか

-8月21日(土)

宮川創(京都大学)「Transkribus(機械学習を用いた自動翻刻システム)」

-8月28日(土)

佐藤将、岩崎俊亮(ESRIジャパン)「GIS(地理情報システム)」

-9月4日(土)

小川潤(東京大学)「RDF(Resource Description Framework)」

-9月11日(土)

永崎研宣「TEI(Text Encoding Initiative)」

◆2021/8/31

ワークショップ

「比較の中のイスラーム経済」

A01, **C01**

小茄子川歩「インダス文明の都市結節型広域ネットワークー「国家」/イスラーム以前の貨幣・交換様式・バッファ=都市ー」

コメンテーター：長岡慎介

◆2021/9/14

ワークショップ

「紛争下のイスラームとジェンダー

ーインドネシアとアルジェリアの

事例から」(限定公開) **B03**

1. 見市建「インドネシアの女性ジハーディストと脱過激化プログラム試論」

コメント・ディスカッション

2. 山本沙希「ポスト・コンフリクト的状況下の相互不信と信頼ー現代アルジェリア女性の視点から」

コメント・ディスカッション

3. オンライン懇親会

コメンテーター：後藤絵美

◆2021/9/30

ワークショップ

「近世インドの港市にみる

コネクティビティ」**A02**, **C01**

嘉藤慎作「近世インドの港市にみるコネクティビティ：スーラトを事例として」

コメンテーター：新井和広

◆2021/10/2

ワークショップ

「西欧社会の難民受け入れをめぐる

信頼のゆらぎ」**A03** ほか

昔農英明「ドイツの難民受け入れをめぐる包摂と排除のポリティクス：交差するセクシズムとレイシズムについて」

コメンテーター：平野千果子(武蔵大学)

司会：黒木英充

◆2021/10/2

ワークショップ

“Revenge of the Vernacular:

Muscovy's Turkic Engagement with

the Persianate World” **B01**, **A02**

ウルファト・アブドゥラスロフ(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)

コメンテーター：濱本真実

司会：近藤信彰

◆2021/10/2

AA研共同利用・共同研究課題

「現代ムスリム知識人の変容と交流」

2021年度第2回研究会 **B02**

1. 高尾賢一郎(東京外国語大学AA研/中東調査会)「趣旨説明」

2. 岩倉洸(東京外国語大学AA研/京都大学ASAFAS)「現代アゼルバイジャンにおける公的なムスリム知識人の定義と役割ーカフカース・ムスリム宗務局の視点からー」

3. 山根聡「南アジアの思想潮流とターリバーン」

4. コメント：参加者全員

◆2021/10/16

ワークショップ

「日本のムスリムのコネクティビティ」

(限定公開) **A03**, **B02**

岡井宏文「新居浜マスジドと地域の『多文化共生』：故・浜中彰さんの足跡から考える」

コメンテーター：工藤正子

司会：黒木英充

◆2021/10/23

ワークショップ

「近世ムスリム外交の背景」(限定公開)

B01, **A02**

近藤信彰「近世ムスリム外交の背景：一試論」

コメンテーター：高松洋一

司会：秋葉淳

◆2021/10/23

「C01情報交換会」(限定公開) **C01**

◆2021/10/25

ワークショップ

「思想と戦略に見る

ムスリム・コネクティビティ：

パキスタン・アフガニスタンと

シリアの事例から」**B02**, **A03**

1. 趣旨説明

2. 山根聡「パキスタン社会のターリバーン政権へのまなざし：域内関係における新たなコネクティビティ」

3. 青山弘之「シリアにおいてイスラームというレッテルがもたらすコネクティビティ：正の効果と負の効果」

4. 質疑応答

コメンテーター：池田昭光

司会：藻谷悠介

◆2021/11/1-11/14

シビルダイアログ企画展

「動物がつなく世界」

-10月18日・22日

ワークショップ「りなたすってなんだ? : 中世エルサレム巡礼記にみえる未知の生物」(在園児向け)

-11月7日

親子講座「どうぶつえんいまむかし」「びょうきを「いやす」いきもの」(在園児向け)

-11月13日

親子講座「どうぶつえんいまむかし」「びょうきを「いやす」いきもの」(一般向け)

◆2021/11/26

ワークショップ

「オスマン対外関係の諸相」 B01, A02

1. 黛秋津「オスマン対外関係の中の付庸国：18世紀の黒海地域を中心に」

2. 松井真子「オスマン帝国の『条約の書(アフドナーメ)』：カピチュレーション／通商条約／講和条約」

コメンテーター：嘉藤慎作

司会・コメンテーター：近藤信彰

◆2021/11/29

ワークショップ

「内戦下の難民のコネクティビティ」

A03, B03

報告者：佐藤麻理絵(京都大学)「シリア内戦下の人道支援をめぐる構築されるコネクティビティ：シリア人ディアスポラ組織の展開から」

コメンテーター：飛内悠子

司会：黒木英充

◆2021/12/23

ワークショップ

「移民経験と語り」 A03, B01

沼田彩誉子(東洋大学アジア文化研究所)

「オーラルヒストリーから考える東アジア生まれタートル移民2世のコネクティビティ」

コメンテーター：長縄宣博

司会：黒木英充

◆2021/12/27

Workshop

“Visualization and Verification of

Ulama Network in Southeast Asia:

Ijazah and Silsila as Historical Materials”

C01

1. 塩崎悠輝 “Ijazahs of Ulama from the Malay Peninsula: Knowledge Transfer and Sufi Orders”

2. Ahmad Ginanjar Sha'ban (Universitas Nahdlatul Ulama) “Notes on Silsilah and Ijazah of Indonesian Ulama”

3. 石田友梨 “An Introductory Guide to Visualizing Network of Ulama”

◆2022/1/6

ワークショップ

「ディアスポラによる『遠隔地ナショナリズム』と信頼構築」 A03, B03

長有紀枝「母国の信頼構築に影響を与えるボスニア・ヘルツェゴヴィナのムスリム・ディアスポラのコネクティビティ：スレブレニツァ事件のジェノサイド認定を巡るロビー活動を事例に」

コメンテーター：佐原徹哉

司会：黒木英充

◆2022/1/26

Lecture

“Modeling the Development of Premodern Islamic Societies through Computational Analysis of Written Sources” C01

Speaker: Maxim Romanov (University of Vienna)

◆2022/1/29

共同利用・共同研究課題

「中東・イスラームの歴史と歴史空間の可視化分析——デジタル化時代の学知の共有をめざして」

2021年度第1回研究会(通算第3回目)

「イジャザがつなく都市・人・学知」

B01, C01, 公募研究

1. 趣旨説明

2. 水上遼(東京大学)「都市を飛び交う集団イジャザ：13-14世紀バグダードを中心に」

3. 太田(塚田)絵里奈「イステイドゥアーのイジャザ授受を通じた都市エリート間の関係構築：15世紀名士伝記集『輝く光』を中心に」

4. コメント：三浦徹(お茶の水大学名誉教授)

5. ディスカッション

◆2022/2/12

ワークショップ

「思想と戦略に見る

ムスリム・コネクティビティ：

ミャンマーとインドネシアの事例から」

B02, A02

1. 趣旨説明

2. 池田一人「1950-60年代ミャンマーの「ロヒンギャ」に関する予備的考察：ウー・ヌ政権期のイスラームをめぐるコネクティビティの形成、その解体について」

3. 菅原由美「思想と戦略にみるムスリム・コネクティビティ：インドネシアにおける慣習法とイスラーム法」

4. 質疑応答

コメンテーター：坪井祐司

司会：藻谷悠介

◆2022/3/2

ワークショップ

「思想と戦略に見るムスリム・

コネクティビティ：

日本とインドの事例から」

B02, B03

受賞ニュース!

本プロジェクトのメンバーである熊倉和歌子さん (AA研、C01)・長縄宣博さん (AA研/北大スラブ・ユーラシア研究センター、B01) が第18回日本学術振興会賞を受賞されました。また長縄さんは、日本学士院学術奨励賞も受賞されています。お二人の優れた研究成果が本プロジェクトとも相乗効果を生み出すことを期待しております。おめでとうございます! (ニューズレター編集担当)

1. 趣旨説明

2. 中溝和弥「インド・ムスリムの現在：選挙政治をめぐるコネクティビティ」

3. 工藤正子「パキスタン人父と日本人母をもつ若いムスリム女性たちのアイデンティティ構築：信頼とジェンダーの交差をめぐる考察」

4. 質疑応答

コメンテーター：熊倉潤、見市建

司会：藻谷悠介

◆2022/3/15

ワークショップ

「国際商業における信頼構築」

A02, C01

1. 和田郁子「オランダ東インド会社による南アジア・ムスリム船主への役務の提供：船員の事例を中心に」

2. 濱本真実「ロシア帝国東部の国際卸売市場におけるモスクの役割」

コメンテーター：新井和広

◆2022/3/26

ワークショップ

「アフガニスタン問題と越境的イスラーム主義の起源」 B01, B02

1. 田中浩一郎 (慶応義塾大学) 「イスラーム革命とアフガニスタンをめぐる諸紛争：地域パワーバランスとイスラーム主義の影響」

2. 質疑応答

(2022年2月16日現在)



Image from Alamy Stock Photo (Contributor: B. O'Kane)

表紙解説

Tahmasp receiving Humayun (フマーユーンを歓待するタフマースプ、1660年代後半作成)

イランのイスファハーンにあるチェヘル=ソトゥーン宮殿の壁に描かれた壁画。同宮殿はサファヴィー朝の第七代君主アッバース2世 (在位1642~1666) の命で17世紀中葉に建造された。壁画に描かれているのは、宮殿の建造よりおよそ100年さかのぼる1544年に催された宴の様子である。正面奥の席で向かい合って座っているのはこの宴の主催者と主賓の2人であり、右がサファヴィー朝の第2代君主タフマースプ (在位1524~1576)、左がムガル朝の第2代君主フマーユーン (在位1530~1540、1555~1556) である。当時、フマーユーンはアフガン系のスール朝のシェール・シャーとの戦いに敗れてインドを追われ、サファヴィー朝に亡命していた。タフマースプは宴を催して不遇の状況にあったフマーユーンを慰めたのである。特に注目すべきは、二人の君主がほぼ対等に並んで一枚の絵画に描かれているという点である。サファヴィー朝・ムガル朝間の関係の親密さ、対等で友好的な関係が示されている。このシーンは、ムガル朝の史書『アクバルの書』の中の細密画でも描かれている。

解説：嘉藤慎作

参考文献

Blair, S. S., and J. M. Bloom, *The Art and Architecture of Islam 1250–1800*, New Heaven and London: Yale University Press, 1994.

Sims-Williams, U., 'On Display in the Treasures Gallery: Humayun's Meetings with Shah Tahmasp', 03 Apr. 2017 (<https://blogs.bl.uk/asian-and-african/2017/04/on-display-in-the-treasures-gallery-humayuns-meeting-with-shah-tahmasp.html>, 参照日: 2022年3月3日).

羽田正「西アジア・インドのムスリム国家体系」歴史学研究会 (編)『講座世界史2 近代世界への道—変容と摩擦—』東京大学出版会、1995年、75–109頁。

池田昭光 (いけだ あきみつ)

1977年生／明治学院大学／人類学

主要業績：『流れをよそおう：レバノンにおける相互行為の人類学』（単著、春風社、2018年）

- ひとこと**：コロナで海外調査に出られないが、おかげで普段よりはゆっくり本が読め、それはそれで悪くない気がする。目下、昔からさっぱりイメージがつかめなかった室町時代、幕末、満州事変あたりを勉強中。

日下部尚徳 (くさかべ なおのり)

1980年生／立教大学異文化コミュニケーション学部／南アジア地域研究、国際協力論、開発社会学

主要業績：『わたし8歳、職業、家事使用人。－世界の児童労働者1億5200万人の1人』（単著、合同出版、2018年）

末森晴賀 (すえもり はるか)

1991年生／北海道大学大学院文学研究科博士課程／近世オスマン朝－ヨーロッパ関係史

主要業績：『ムスリム捕虜の語る近世の地中海－マルタの「海賊」とオスマン朝のはざまで－』（単著、風響社、2021年）

- ひとこと**：近代以前におけるオスマン朝－ヨーロッパ間の海上秩序のあり方について、「海賊」を軸に研究しています。また、「海賊」に攫われた捕虜の記録などから、「書くこと」とは何か考えています。

高野さやか (たかの さやか)

1978年生／中央大学総合政策学部／法人類学

主要業績：『法の生成』の人類学に向けて』（共著、『文化人類学』86巻1号、127-138頁、2021年）

- ひとこと**：国境を越えるグローバルな法現象として、法の領域に関する国際協力にも関心をもっています。

子島進 (ねじますすむ)

1964年生／東洋大学国際学部国際地域学科／文化人類学

主要業績：『ムスリムNGO 信仰と社会奉仕活動』（単著、山川出版社、2014年）

- ひとこと**：在日ムスリム第二世代に注目しています。彼らが活躍するクリケットや、イスラム系のインターナショナルスクールに関心を寄せています。

山本沙希 (やまもと さき)

1985年生／立教大学異文化コミュニケーション学部ポストドクトラル・フェロー (PD) / マグリブ地域研究、ジェンダー

主要業績：『「なんとかやる」ことで創られる日常－現代アルジェリア女性の有償家内労働にみる実践的戦術』（博士学位論文：お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科ジェンダー学際研究専攻、2021年3月）

- ひとこと**：最近フィールドに行けないので、アルジェリアの女性ジャーナリストが1990年代の内戦中に創刊した女性雑誌記事の読み込みを始めました。当時の国内外の情勢に対するフェミニストの見解を知るのは興味深いです。

MALLETT Alexander

1980年生／早稲田大学／歴史学

主要業績：『*Magic in Malta: Sellem bin al-Sheikh Mansur and the Roman Inquisition, 1605*』（共編著、Brill、2022年）

- ひとこと**：I enjoy hiking in the mountains of Japan, going to Mexican restaurants, going to jazz clubs and opera performances, reading books from Murakami Haruki, and listening to the music of Band Maid.

Islamic Trust Studies News Letter

イスラーム信頼学 News Letter No.02

2022年3月20日発行

文部科学省科学研究費・学術変革領域研究 (A)
「イスラーム的コネクティビティにみる信頼構築：
世界の分断をのりこえる戦略知の創造」
(イスラーム信頼学) 総括班事務局
<https://connectivity.aa-ken.jp/>

[デザイン]
株式会社 デザインコンビビア

[発行]
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
電話 042-330-5600 FAX 042-330-5610
<http://www.aa.tufs.ac.jp/>

*本誌の無断転載、複製、複写の一切を禁ず。



東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所
Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa
Tokyo University of Foreign Studies

